

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三郵便特許認可
昭和五十年八月二十五日 印刷
昭和五十年九月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五八〇号



日川協加盟

No. 580

特集・課題吟をう狙ポイント

九月号

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

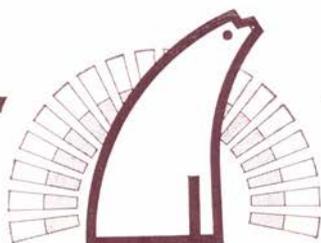
《ホテル・旅館》

- | | | | |
|-----------------------------------|-----------|------------------------------|---------|
| 白浜温泉 — 忘れぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル | ホテルパシフィック | 徳島・鴨門 — うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 | 鴨門 |
| 政府登録国際観光旅館 | 朝日 | 政府登録国際観光旅館 | 鴨門公園ホテル |
| 勝浦温泉 — 海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 | 中の島 | 紀北・橋本 — ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 | 紀の川苑 |
| 湯峰温泉 — 山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 | 湯の峯荘 | 大阪・泉南淡輪 — 魚つりに ゴルフに
観光旅館 | 淡の輪苑 |
| 和歌山・新和歌浦 — 海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 | 萬波 | 大阪・なんば — 清楚で近代的なホテル | ホテル南海 |

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄



HORAI



蓬萊商品の目印

アイスクャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

大 阪・なんば



涼 亦 火

冷房車足組む女の影暑し
冷房に夢をあずけて会議中
後遺症考えたくない試歩の顔
しとやかに炎えつつ自負はよく喋舌り
切り貼りで生きぬいて来て喜寿と古稀

恐ろしく暑い日が続く。もう一寸の辛抱だと老骨に言いきかせての日暮しである。先月の大雨で浜寺の宅に雨もりが出た。屋根全体を締め直す必要があると屋根屋が言うので梅雨あけを待って一か月の予定で大修理を始めた。ベテラン職人でもこの猛暑は相当にこたえるだろう。昼食のために降りて来たのを見つけて話しかけて見た。黒いスポーツシャツみたいなもので全身をくるみ、ゴム底の靴、ベトナムの農民が用いる鍔の広い帽子、こう

した装束で毛布を持って上がる。お尻が焼けないように敷いて仕事をするが勾配の急な場所では沁るので中腰のままという。
快川禪師は「心頭を滅却すれば火もまた涼し」と言って寺塔と共に炎の中に没したそうだが、毎日毎日心頭を滅却するわけにもゆくまいに、聖職とうけとつての職人氣質というものだろうか。冷房のきいた座敷でこの原稿を書いている私は、何か非常に悪い事でもしているような気がしてならない。

庵 々 生 島 中

号 月 九 塔 柳 川



座右の句

酒とろりとろり大空のころかも

(路郎)

私の句

濃い緑一色となり塔沈む

西 いわを

川柳塔九月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

火亦涼……………中島生々庵……………(1)

推敲と省略……………森田茗人……………(2)

誹風柳多留廿五篇研究……………(7)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔(同人作品)……………西尾 栞選……………(4)

水煙抄……………菊沢小松園選……………(30)

麻生路郎物語……………(9)

秀句鑑賞……………(同人吟)

近作……………諸家……………(39)

百人一首と川柳……………(15)

愛染帖……………富士野鞍馬……………(38)

50年度二賞候補作品中間発表……………橋高薫風選……………(40)

推敲と省略

森田茗人

一ぱいの飯を食べ終って「少し…」と茶碗を妻に出すと私の適量の二はい目を入れてくれる。

「お茶を入れてくれ。」と言わなくてもただ私たちの日常会話の中には、このような互いに心得た省略語が多くある。

私は、川柳と共に短歌もやっているが、短歌作品が十七音字で表現出来得る場合は、短歌としての作品を捨てている。つまり、冗慢で、推敲が不十分だからである。

俳句で季語が用いられるのは、それによって句の時点が表わされるから、季節を言わなくてもよいわけである。

そのような制約をあえて必要とせず、自らの生活の上でそのイメージを十七音字に集約して伝達しようとする川柳は、句の構成の上でむづかしい。

あるイメージが湧いたとき、それは、多くの言葉を持っているが、それを川柳によって表現する場合は、その語がなくても通じるものは省いて、いわゆる絶対語だけによって

課題吟を狙うポインント	正本水客	(42)
ケース・バイ・ケース	傍島静馬	(43)
一分間の柳論	若柳潮花	(43)
本社句会三冠王	河井庸佑	(44)
幸福の探求	戸田古方	(46)
句と共感について	直原七面山	(47)
私のメモ	吉田水車	(48)
消せるものなら消したい	藤村青一	(50)
竹荘君を悼む	市場没食子	(51)
雅号ぶっちゃけばなし	嘉数千代香	(65)
初歩教室	本田恵二朗	(54)
大萬川柳「比べる」	川村好郎選	(56)
柳界展望	(庸佑・整理)	(58)
本社八月句会	清水一保	(60)
各地柳壇(佳句地10選)	和田維久子選	(64)
一路集	川口弘生選	(52)
「避難」	藤井明朗選	(53)
「捨て猫」	(二三夫・葉子)	(69)
「年寄り」		
編集後記		

座右の句
 座右の句
 医者が死を早めたことを誰が知る
 私の句

わが道を行く蛭蝓の白い痕

若林草右

(路郎)

組み合わせる。

涼み台そばを蜜が二つ三つ

で

に

にも

私が朝鮮で川柳を習い初めた頃、古老の今村羅炎先生が講演会で柳話の中に引用された句だが、助詞の使い方一つでその情景が変わってくるのおどろいた。

子も今日の日課を終えたよい寝息

これは、私の若い時の句だが、これを

子は今日の日課を終えたよい寝息

とすると、子供だけが働いていて、父は何もしなかったことになる。

私が担当している新聞柳壇の愛好者で成瀬幸恵という学者があつて、その老人ホームを川柳慰問したとき、その人から、哲学者の西田幾多郎が随筆の中で短歌、俳句と共に川柳を取り上げて、一つのイメージを『いろは四十八文字』を駆使して頭の中で十六万べん繰り返しながら集約して出来上った作品は、画家が絵具を用いて画布に書き、音楽家が楽器を用い、彫刻家がノミを揮って表現するのと同様に芸術品である、というふうなことを言っているのを聞いたことがある。

イメージを温めながら推敲を重ねた作品には、作者の生命がかけられている。心の叫びとして詠われる川柳は、いつまでも人の心に残るものでなければならぬ。「いのちある句を削れ」とは、このことである。



西尾 栞選

今治市 原田 一風

紫陽花の騙し始めは白で咲き
賑やかに百姓一撈バスで発ち
養老院ベッドを下りぬ人ばかり
枇杷熟れて蟻には蟻の先取権
引き金を握る女房に扶養され
姫鏡捨てて三面鏡で嫁き

島根県 小砂 白汀

汲み上げて見れば湖水に色がない
転ろんでも転ろんでもマりに道がある
魚でさえ粧う うろこを許さるる
詩にされた義理で椰子の実流れつき
三人になるときれいごとばかり
欺まし合いかも 男と女の旅路

堺市 河股 緑水

この焦燥あお罐切りが見当たらず
商品に西日入れざる構えかな
顔のない女が注文聞いてゆく

四畳半どう転っても四畳半
子を掩護する実弾が切れかかり
過去を焼く手紙の灰のこれだけか

松原市 谷垣 史好

昼火事を見て決心つきにけり
迷うてる心 林檎を真っ二つ
完膚なきまでやっつけるのも女
夏呆けは紅茶キノコのふえる夢
青春が欲しくて麦藁帽を買う
八月の最後の週のさみしけれ

具塚市 野坂 つき子

すぐ背中向ける男で負けている
Gパンのポケットレモンがころげ落ち
雨に打たれて自惚れから醒める
どうしてもうんと云えない哀しい日
予備知識何の役にも立ってはず
或るブランクへ焦りとなって空廻り

鳥取市 河村 日満

探し得た墓に句があり句が若し

極楽にまちがいのない掌を組ます 義祖母天寿全う(三句)

天寿全うしてと謝辞かるし

大往生を満足にして皆が酔い

やはりよし女の声の選挙カー

指人形の動きびちびちよく揃い

米子市 林 瑞 枝

肩書きの重さ非情な兄に変え

姪に子の誕生希望の雲が湧く

転んでも砂漠の彼方にある泉

しまい風呂今日を心に問う鏡

一隅を照らす人夫の玉の汗

退いて敗けるが勝とする善意

富田林市 岩 田 美 代

指切りや八方美人の丸い指

こりもせず約束事が好きと言う

髪洗うて夏の嘘を聞く蚊やり

結局は言えぬ言葉を弄ぶ

企みをかくすに傘が小さすぎ

夏帯や私を騙す彩を選る

青森市 工 藤 甲 吉

正直な顔に「米価」のハチマキし

世の中に余り晴竿雨読する

みちのくへ芭蕉のような人が来る

お粗末な茶碗を茶人ほめてくれ

抱きしめてやりたい時もある位牌
全身全霊よしきりは鳴きとおす

八尾市 宮 西 弥 生

一枚の切符へ女は戻らない

一本の道ゆく女には いばら

横道にそれて心のはずむ彩

トンネルを出ると歴史がまた変り

失意した時から海の虜です

思い出のここだけ白紙そっとおく

香川県 三 井 醉 夢

会えば足る友あり急ぐ七七忌

豊かさをもらう一夜の男たち

あっけなく別れてからの温かさ

やきものの旅で最後は手付け置く

くちなしの花に介錯しいられる

浜木綿の乱れ愛執断ちがたし

大阪市 不 二 田 一 三 夫

「動」よりも「静」の重さを知る香煙けむり

平言俗語が生きてる東大出

田中さんに似たタレントも共に消え

スカイラブ米ソは色気惜しみなく

スコールのような愛撫へ寡婦として

大阪市 西 出 一 栄

食堂街羊頭狗肉で客を呼び

この不況よそこに毛皮のファッションショウ

消耗品でない寶石店の多いこと
古いぬればおくれ毛までもむさくろし
年輪とともに思考の錆びていき

大阪市 金井文秋

救われぬ女の愚痴は聞いていず
仏に掌合わす心と別の愚痴
日曜大工仕上り待たずけなされる
地球のドラマその一瞬に生きている
地植えの強み一足先に咲き

竹原市 三宅不朽

この町の素顔のひとつ蛭とぶ
悪名さえ残るきざしもなく四十
死んでもうてなぜ相談いわなんだ言わなんだ
名も富も捨てるへ女しらみだし
騙されてやろう大空の真下

竹原市 森井菁居

たまに来て村は素敵ねなどと言う
目の届く距離へ妻子を泳がせる
先入観捨てると気安げに他人
法的には問題はない気まずさよ
三才の知恵が無視する十円貨

大阪市 川口弘生

(長男この頃)

船旅の話公害の事ばかり
芸術もはかないものに水中花
父の影やどす娘の男性像

羽根生えるまでは働く蟻でいる
男の夢消耗品として果てる

大阪市 吉田圭井堂

淡々と話せる仲も半生期
正常な方がなんだか怪しまれ
出来た子の月が合うが合うまいが
母子程違うが愛し合つてるとかで
何もかもそつが無くても嫌われる

兵庫県 遠山可住

夕立ちを賞めてナスビの手をくくり
鍵あけて鏡の僕に迎えられ
喜びの雨がぼつぼつ愚痴になり
夜なきそば下宿の窓へ来て止り
居なければ居らないで済む副課長

八尾市 香川酔々

新しい古事記ポルノの挿絵入り
一番星見つけた鬼は子に還る
断絶を解く方程式を見つけよう
鈍行で似たもの夫婦旅に出る
天皇の微笑に深い傷がある

高槻市 若柳潮花

鷹ヶ峰句になる山に月は出ず
褻持てば右手もふさぐ蛇の目傘
くまどりも先代さまに似る奴
真実を噂のなかでせめられる

角屋から大夫一步も出て見せず

新宮市 大矢十郎

給油所のひまは一日水を撒き

クローラーの部屋で工事の指図受け

御中元用へ煙草を買い交える

御近所の明治にもてる妻がおり

先妻の子と聞き謎が一つ解け

倉敷市 小野克枝

陽の長さタイムカードは持たぬ妻

初めてのポーナス抱いて娘は眠り

口実を作り過ぎたらボロが出た

しまい湯へ声かけてみる親思い

アルバイトさっさと決めて合理主義

八尾市 大路美幸

売り出しのレジーは乾いた音で鳴り

電氣屋でねじ一本を包ませる

麻雀屋親父は隅で馬を追ひ

屑入れを買うにも大きき色値段

しまい風呂に浮く大将の首三つ

倉敷市 小幡里風

負けられぬ靴先明日へ向いている

対立の黙秘へ啼いた 油蟬

全くの白で余韻を聞いている

小突き合う二人へ噂の人が行き

風邪気味と云うて穢たない手を使い

飢えるなど春の蕨秋の茸 弥高山開拓村にて(二句)

電の降る煙草畠に妻狂う

峰に雲湧き酪農の夢が湧き

借金を背負う乳牛のうのうと

ベコ産んだかやと老父の臨終

倉敷市 藤井春日

何糞と思えど弱い受答え

問い詰めて嫌な真実聞かされる

共稼ぎボタンの落ちた背広着て

ハイで添いハイで別れて悔もせず

過去の疵白いドレスの下に秘め

豊中市 戸田古方

桃太郎思いもかけぬ日に生れ

死へ一步近づくとブルスタしかめる

私を私がまだ守ってる微熱

一寸気を許してみなはれ蝕ばまれ

娑婆でんがピンチいよいよおそろなり

倉敷市 野田素身郎

長続きの秘訣平均点ばかり

会議に遅れても宴会には遅刻せず

遺体提供やっとお役にたちました

年長者として二次会でまで端座

花火大会たけなわ計算まだ合わず

大阪市 本多柳志

孫と出て踏めば悪路も唄になり

本心が聞けそうで会うのが怖くなり

本心を見つめて見たい距離を置き

六月の白くぬりたい空になり

和顔愛語して老いらくのラブサイン

藤井寺市 児島与呂志

ただ人をまる出しにして母達者

下手な嘘気にかかっている二三日

サンスエソ洩れて歯医者にまだ通い

髪染めた日の妻らしく女なり

酒加減しょなと約束したまんま

(悼英断さん)

神戸市 仲 どんたく

新婚が住む色で干すバルコニー

老眼鏡かけ特攻隊生き残り

交通至便近所に医者もあり寺もあり

アルミサッシュに田園風景犯される

黒髪のまま恍惚に入りし師よ

西宮市 藤村メ女

愛終り涙でひつぎの扉締め

白衿の母を見直す悲しい日

悲しみに耐えるハンカチ握りしめ

精薄に長所見つける母の愛

小雨降る外人墓地の曼珠沙華

泉佐野市 阿萬萬的

落人の里山菜の味まもる

妻の座が一家の柱孫が出来

山菜もテレビは都会の味にする

トンネル二つホホウ此処らも分譲地

過疎ながら夕陽がいっぱいある漁港

倉敷市 水粉千翁

お別れの傘の重さを貸し惜しみ

睡蓮の真昼を飾らねばならず

少年の思想へ白い雲が湧き

思い出の足音にする地図を踏み

砂踏めば旅の掟としてきしむ

大阪市 中川滋雀

朱を入れてみたい誤植を積み上げる

そんなこと言うた記憶が責めとなる

しどろもどろ断る嘘が嘘になり

儲かりまへんナア顔一ぱいに歯が白い

巷に唄 恋と涙と雨にむせ

柏原市 大崎可動

八月の足跡 海が恋しいか

僕はいま妻と奢りを捨てている

凡人の未来は空想の中にある

力無き者よ空腹ではないか

幾山河越せばまぶしい樹であるか

松江市 小林孤呂二

ポーナスの日の微笑みは仕舞つとこ

取次ぎへ生理休暇と申されず

管理職はつきり蛇行は許されず
緊張の筆が課長の字にならず
暴走族死にたいなどは考えず

島根県 堀江芳子

退院したら話したいことみんな消え

灯り恋う虫と点字を読む夫と

脱いで脱いで蚕の厳しさから抜けず

わがまを病のせいにされた悔い

つまみあげるほどの喜びわかちあう

岡山県 嘉数千代香

露路裏の陽にへだたりのない恵み

憎しみの矢となり記憶よみがえる

抱く石の重さに善人疲れ切り

企らみのあるほほ笑みにつまづく日

子等育ち母の時計は止りがち

東大阪市 落合思月

のっぴきのならない用事と云うデート

君と僕あなたと私でうまがあい

来世も添う約束がきた家裁

女にはもてない事を妻が知り

すてた過疎水のうまさのどにしみ

和歌山市 野村太茂津

煩惱無尽生きてる証抛明からさま

悴せのときだと思ふ汗拭かず

自尊心喋り過ぎてる隙を突き

美しい嘘も混えて他人めき
俗臭の消えないままの禪に恥じ

神戸市 中村ゆきを

夏の夜の出来事甲虫が逃げ

ビヤガーデン誘えば俄雨になり

ぼろ隠すつもりがぼろが出過ぎる日

廻り椅子汗の尊さもう忘れ

中天へ花火絢爛たり刺繍

大阪市 黒田真砂

自己嫌悪一瞬女を忘れかけ

虹の橋手さぐりにても登り度し

角砂糖溶けて素直な刻を持ち

フレヤースリーブはなやぐ肌を覚え居り

化粧品に金かけ五十の抵抗

倉敷市 松下梁水

おふくろの十指は弥陀の掌にも似て

焦せる日の愚かを論ず蟻地獄

真直ぐな道を選べば四面楚歌

筋道を通してからの孤独感

黒幕は末っ子だった笑い声

桜井市 岩本雀踊子

先方との距離を計る贈り物

もてあそぶ鉦のまるさにある妬心

苦しみから逃げる女の時刻表

おかまいもしません妻を客がほめ

忘れてた土の香りが指にふれ

竹原市

山内静水

禁煙三日目昔の昆布はうまかった

禁煙三日目だれとも約束しておらず

禁煙三日目妻はうすうす知っておる

禁煙三日目灰皿まだきれい

禁煙三日目大の字に寝てみても

泉大津市

村上春巳

ストレスをとばすアクセルぐつと踏む

ギクシヤクときしむ世間を逃れて来

富士山が見えたつもりの館山寺

単純に喜ぶ妻と旅の宿

石垣は葵の重みじつと耐え

岸和田市

高橋操子

前進へ失意の日々のありてこそ

人は鬼などと思えずつまずきぬ

お菓の流行を追う病みほうけ

道連れの親へ冷たい世の批判

倅せは顔まで育ての親に似る

大阪市

小出智子

女は今日も小さな奇跡を待っている

胸の奥で化石となってゆく炎

倅せな女がネクタイ買っている

菊は菊の香りでひとが騙せない

わらびもち期末テストが今日終る

ショッピング母の手頃と娘の手頃

愛一つ梅雨明け雲にきいてみる

したたかな計算ずくで恋に生き

秘めごとを持つ夜の鏡曇り出す

糠味噌へ亡母のとおりのおとましさ

富田林市

和田維久子

紫陽花や人疑わず掌を洗う

ある時は無知も倅瞳をつむる

本当の答は神にまかしく

パン焦げる香り流れる梅雨ごもり

生涯を黒衣つらぬく風しずか

松江市

吉岡遙児

前垂れを心にかけている栄え

視線避ける街あり日傘斜に構え

いままさに秋太刀魚焼いてます換気扇

てんとう虫の歌日溜りの葉を滑り

牧草がしとね地球の鼓動聞く

松江市

岡崎祥月

子はみんな巢立ち二人でのむ沫茶

雑音を入れるものなく老い二人

増築の夢算盤の玉はじく

師の恩を忘れずはるばる汽車に乗る

方向音痴妻と小さい喧嘩する

松江市

柳楽鶴丸

アア無情恋を二十年後で知り
せめてもの慰め清い仲でした
二十年の空白どうにも埋められず
二十年前のロマンを美しく美しく
死を考えたたら——敗北

西宮市 若林草右

氣象衛星雨雲日本流しそう
実効湿度飽のおせわになる扉
六日だけ歴史に残る名がきまり
三面にも載らない事故で世を早め
スト詫びる掲示日付けかえただけ

松原市 玉置重人

妒ばた焼天下国家を取る話
素人のキニューリどれもこれも曲がり
気短かな頃のあなたがよかったわ
未練まだあるにはあるう棺の釘
白衣脱いだ看護婦色もよく似合い

大阪市 本間満津子

白杖

風のない十字路に立ち耳澄ます
右歩き又つきあたる車よけ
真中をまっすぐ歩くと目明き云い
見えぬわけを街で可愛く兎に問われ
手引きしてくれた兎の帰り途気にかかり

米子市 増田竹馬

「只今」は空耳だった二タ七日
大砂丘恋のはげしさ喋らない
姑の味嫁が受け継ぐ落し蓋
全力投球あとのビールの旨いこと
重った蠅へためらうハエ叩き

大阪市 神夏磯道子

気がねした紅うすくうすく引いて寡婦
順調に育ち成人して背き
焦点にされて自由にふるまえず
妻の座を守る貫録に押えられ
一言が多すぎます日曜日

島根県 松本昌

日本は倅せ やせる本売れて
寝るだけへ化粧女の心知る
清張を読む寝つかれぬ夜の不安
四季確か刑務所の庭花開く
週休二日に縁なき職で車洗う

呉市 榎田英詩

父として大船頭の胸を張り
これだけは譲れぬ妻が向き直り
さよならへ振り返らない男なら
アリバイを探す不倫の恋だから
そのむかし兵器造った手に聖書

島根県 榎原秀子

青梅の酸いさ若さのなかのもの

ねたましい心法話のなかに捨て
失敗を重ねほんとのものになり
投げられた石の痛さに耐えておく
贅肉の驕りスカートあわてさせ

岡山県 竹内翁童

見えぬ血を流して女の舞扇
いつわりの愛か紫煙ゆれている
六十の手習い現代かな使い
ドクドクドク人の湧いてるターミナル
女みな美人にみえる一人旅

大阪府 天正千梢

もと恩師厚意の上へあぐらかき
「これが私か」と何べんも使う吸取紙
似たり寄ったりの人生高下駄はきかえる
「悪うおましたんや」と十字架を大事がり
日記を閉じて無口の日が多く

美祿市 安平次弘道

ターミナル羊の群に似たラッシュ
進歩する科学一億モルモット
頼もしく背丈けも酒も子に越され
神話復活戦争の傷を撫で
見上げてる口口風船空へ逃げ

西宮市 島居百酒

結局は厳正だった遺言状
老いらくの燃えても逢う日は疎くなり

真似ごとの植木いじりが皆枯らし
紫陽花の褪せて老婆の影となり
陰徳を活字明るく公開し

守口市 羽原静歩

外柔内剛息子は息子の旗を持つ
菩提寺の苔それぞれに悟り持ち
人間に還る白旗高く揚げ
万国旗クーデターの彩もあり
情熱のかけらをトランペットに吹く

大洲市 堀内暁風

向き向きに話題豊富な床屋さん
過去は過去今全盛の有頂天
七月の汗老眼がずり落ちる
株買ってダウン続ける相場欄
ブロックの穴から覗く好奇心

鳥取県 清水一保

サボテンの心素直に刺も花
生甲斐をそつと告げて野らの歌
一筋の道にいそしむ蟻の列
生き抜いてともした蛍の灯が貧し
人生の目的他人より説かれ

堺市 高橋千万子

(祥月命日)

生前を振り返りつつ経をさく
硯する不意の出費もうれしこと
十年のへそくり入歯になろうとは

見てもらう人あり好む染小紋
子供なりスリル求めてスベリ台

島根県 錦 織 文 子

光化学酸性雨などの列島禍

お宮の松に佇てばお宮のささやきも

熱海にて (二句)

窓明けりや海が飛び込むここ熱海

市長賞夜店の苗とは見えず

一徹へ転職きかぬ性なれば

伊丹市 小川 静 観 堂

ええ加減に忘れようか抱いてはみたが

たまさかのオートミールは亡妻の味

疼ずく心茶房の隅で君を待つ

朝涼し旧約聖書をパチン閉ず

(野迷路氏の死)

怒ってるような恰好も甲蟲

大田市 藤 田 軒 太 楼

飲む口を持たぬ酒やの亭主なり

先輩に花をもたせた爽快味

老残の生甲斐句座に幸求め

安らかに永眠った母の居間むなし

(母永眠)

想い出は胸せきあげる盆灯籠

竹原市 時 広 一 路

夕焼けに人恋う浜の松林

一本の線が引けない負い目持つ

手に届くところへ夢を置き変える

挑戦をしてみないかと雲の峰

静かな夜 雨が運んでくる汽笛

倉吉市 奥 谷 弘 朗

燃え盛る時のようにはひらめかず

雨男又出張をひやかされ

果たせない夢を託する子が居らず

菊作り本気になって妻モンペ

無造作にみせて庭師の勘所

神戸市 小 浜 牧 人

八月の深傷が疼くきのこ雲

足を知り暮らしのペース乱さない

ジンフィズ女の嘘を聞き流す

忍び逢うポータワーに灯が点る

肩書きを脱げば涼しい風があり

大阪市 大 坂 形 水

修業時代の辛さを言わぬ坐りだこ

一日中坐り疲れた浴衣会

太鼓判押されなかったドック入り

急にどうとことはないレントゲン

看護婦さん下の世話にも手馴れてる

島根県 堀 江 正 朗

三度目の飯 食べたから今日が暮れ

掌に花を乗せて心をふくらます

あまりにもみじめ補聴器やめにする

言い張って小さき城の主たり

尼崎市 黒 川 紫 香

鮎ばかり喰べて山の夕べは静かなり

軒低く低く駄菓子を売っている

秘仏見せて和尚の話愉快なり

まばゆい夕陽が嬉しい食堂車

八尾市 高橋 夕花

母に似た古い女の鍵を持ち

距離おけばやっぱり私の好きないろ

嫌いな服で今日は他人の顔をする

花影に言葉残してきた不安

三重県 川上 大輪

ふる里の風は真直ぐ吹いてくる

話し上手で女は齡を盗まれる

一生の願いて金の事かいな

小指絡ませて女は約束したつもり

大阪市 江城 修史

粧いが過ぎて多弁となる女

友一人失う夜の流れ星

愛憎のしこりが距離となる別れ

隙のない男の心錆びている

宇部市 平田 実男

闘病の長さへ嘘を聞きあきる

蟻の列へリーダーシップを笑われる

未亡人粹のせまさを感じる日

この熱き涙を女優として見られ

橿原市 岩井本 蔭棒

敬老の餅のうまさのどを詰め

齋場に煙り上らぬ日の安堵

賞状が長押で泣いている不貞寝

凡人の欲もう一寸もう一寸

愛知県 渡辺 曉童

狸でも良い 旅は道づれ

柿の青葉に 示談難航

炎の果ての 色のむなしさ

還暦という きかめ切り替え

八尾市 高杉 鬼遊

お互に保険を掛ぬことにする

紅灯の宴に正義などはない

ライスカレー一皿うまい店を撰る

七彩の夢も豊かにコヒー飲む

岸和田市 葛城伊三郎

故郷を出て巣箱のような家に住み

国会も済まぬに煙草たんと買い

正直に馬鹿がついてる僕のこと

迷い児を屈けてひょんな眼で見られ

大阪市 有信 新之助

腹の児が手伝っている食べっぷり

ひまな日もそれで事済む日銭かな

大阪は儲ける街や山を恋い

几帳面でなかったらいま頃大物か

出雲市 原 独仙

欲求の不満を誘うネオン赤

うれしさは海洋博へ行けと子等

父健在午睡の躰 青田風

燃さかる二人へ手を出し火傷した

名古屋市 吉田水車

社長とは半歩のちがいがタイムカード

もの言えばどつかれそうなジープンよ

お寺はんずかずかずかと通られる

サイレンは呼吸に似たり救急車

平田市 久家代仕男

黄色いものが黄色に映る有難さ

英才鈍才子が中ほどに居る安堵

露もろし露に触ればなお詭し

眼帯の下で侮蔑の目がうずく

岡山市 出原敬一

人間が一番こわい自閉症

据膳で待つ人妻の果し状

終業ベルマリオネットの糸ゆるめ

アベックへ値引断る娘も二〇才

高槻市 福田丁路

夕立を避ける術なく濶歩する

マイペース崩さず損な役廻り

知る人ぞ知ると野心の無い昼寝

梅雨明けを告げる雷親しまれ

広島市 林野甦光

贅沢な愚痴半分は身に覚え

家一軒買える値段を指にはめ

遠目鏡の中で誤解が解けかかり

兄弟のリズムを母が押してやり

鳥取市 両川洋々

帰巢性信じて門灯まだ消さず

人恋えば雲亡父になり亡母になり

捨てて来た故郷に良く似た街で住み

金も呼吸してます利子に居直られ

島根県 大森孝華

ほほ笑にとけて再会過去へ触れ

向い風母のぬくみよ厚い壁

転職の意地へ勝負を賭けてみる

粧うてメンバー旅の顔になり

和歌山市 若宮武雄

背信の肩巾のない影を踏む

本流と云われゆったりとして深し

石ころの主張踏まれて埋もれる

平行線いつかは交り信じてる

今治市 越智一水

清貧を愛し一輪ざしが好き

山けずる意地へ松喰い虫がつき

信じない神を信じて灯をともし

打水のそこから三味の音がきこえ

大阪市 神谷凡九郎

肩こりも知らぬ私は可笑しいか
冠婚葬祭参列者にもある筋目
泣く事が有る女にそれも幸らしく
数って何 過半数って何やろう

京都市 都 倉 求 芽

雲切れたところから夏の予告編
カラコロと浴衣の下駄が恋を知り
死ぬるまで女は鏡から逃げられず
ハンカチの汗が今日を讃えてる

堺市 藤井 一二三

言葉足り過ぎて誠意を疑われ
老いと遇う帰省哀しきものを見る
情死事件わかるわかると倦怠期
両方を立てる妥協をこづかれる

(町会長苦戦)

宝塚市 傍 島 静 馬

真実一路唱う識者のスキヤンダル
飲ましても飲ましても女静かなり
ソロバンが恋の燃焼さまたげる
おっとりで無口ええしの子に見られ

岡山市 池 田 古 心

さばかりの事にむくれた日の自嘲
悔い多き世なりき足踏みばかりして
怒鳴るだけ元気になった病める床
五本の指揃えど器用と不器用と

岡山市 松 本 忠 三

真直な道を選べば嘲笑の渦
弁当の醬油を借りて事務机
住職の代理も出来ず居候
方言を丸出しにして捨てた故郷

兵庫県 大江 秋月

香水の匂う單車とすれ違い
天人の羽衣今日は雨に濡れ
団体の話し相手になる次郎長
登呂遺跡太古の家の四畳半

(三保の松原にて)
(梅蔭寺にて)
(登呂の遺跡にて)

和歌山市 垂井 千寿子

北陸の旅「肉付きの面縁起」(二句)
現在は姑泣かされると誰か言う
伝説のかなしさ我が家は平和です
記念品の文字は消えずに離婚歴
団地馴れ柳に風と聞き流す

東大阪市 竹 中 肖 二

グループの娘が姦しいピヤホール
智慧のない男資本を抱くばかり
紫陽花へ雨雲低く垂れ籠める
骨壺を大事に飾る考古館

東大阪市 竹 中 綾 女

借景が庭の広さを増すお寺
入山料の高さごまかすお茶を立て
お迎え地藏見送り地藏同じ向き
民宿の夜は民話で更けてゆき

(慈光院にて)
(八田寺にて)

松江市 中川晃男

入道雲山の男と握手する

その時になると常識云うとれず

通じない愛想笑いをこわばらす

軌道外ずれた次男の人生よく走り

京都市 松川杜的

式日取着物の柄に合わす妻

還暦の大厄長男に嫁が来る

くちなしの白 夕立の来る気配

二度目のつとめおんなじ処にペン蛸が

藤井寺市 西 いわを

あん蜜の甘さ其の刻だけだった

一瞬にすぎない視線ころ燃ゆ

言い出した人の重みに寄り切られ

妻と出て歩巾の違うのに疲れ

岡山東 横山一声

親子かと思えば夫婦の口をきき

妻強くなって養子と間違われ

雨宿りしたのに自動ドアがあき

目録に月賦ですとは書いてなし

松江市 恒松町紅

ショートパンツで集金人へかしまり

立てひざでショートパンツの不感症

馬鹿々々しい話梅田で乗り換え

支払って又借金を飲んでおき

大阪市 宮尾あいき

誇らかに咲くあじさいへ雨きびし

美しゅう咲いてあじさい何故淋し

集団ではえた白髪はもう抜かず

女一人生き抜く今日の顔作る

今治市 小笠原有里

今日からは貝になりたいたい妥協する

停年になって手相に凝りはじめ

中年の魅力気になる腰まわり

ふと或日いやな自分が私を見

和歌山市 吉野富江

頼まれたような女将の世辞笑い

ふるさとへ乙女を捨てた遠い夢

見解の相違親切誤解され

バーのママ昭和二た桁小賢しい

鳥取県 林露杖

能率を上げて工賃下げられる

雑草の魂舗道割って伸び

死ぬまでも明かせぬ過去の頁

盆太鼓明治の胸の火が燃える

和歌山市 内芝としよ

暑さには負けるものかとカンナ咲き

コーヒーをゆっくり混ぜて打診する

倅せになっておくれと晴着縫う

甲子園記念の土を涙ごと

松山市 谷のぶお

浜木綿の島の夕べのはのかなる
女房の話にひらめき打ち消され
ちぢかんだわが筆跡の自己嫌悪
ホームバーバー愛のバリカンひっかかり

堺市 伏見茂美

大部屋のいびきに夜明けの湯に逃げる
流しそうめん隣同士でせきとめる
満々の水は語らず山のダム
のみ取りにまたかと犬がごろっと寝

守口市 野呂右近

占いの門叩いてから弱くなり
人の世は墓相まであるややこしき
蟬のように殻を脱げないもどかしさ
差し出した手が握れない距離となり

大阪市 西川誓二

不孝詫び詫び下品下生の身を送り
頭脳の不調も戻らぬままに秋
モヤモヤした気持も詰めた旅靴
だんだんと犯人に似させるモンタージュ

和歌山市 津田与史

急ぐことない身を人の波が押し
きびしき世拭いても拭いても汗が出る
夏草は周囲気にせず伸びつづけ
蜜柑の花落ちても匂い失わず

仙山改め 玉野市 小谷嘉一

ダイナマイト男の花道抱いて出る
なめくじの急いでいてもそう見えず
蝶々の過去蝶々は口にせず
せっかちな電話受話器を待たず切れ

大和郡山市 森田カズエ

汐干狩貝がらばかり孫拾う
震度四とたんにのぞく腕時計
真新し算の水の掌に溢ふれ
鑑真の御廟青葉の風通し

(西の京唐招提寺で) 倉敷市 能登原白水

結末は神に任せて愛不変
秒針となり働き蜂となり
史跡訪うオランダ坂の雨に佇つ
盛り上る熱気の中にある進歩

諫早市 原田明春

給料をとる妻で飯の仕度せず
経済成長貧乏人の居る不思議
道問えばポストの電柱のと教えられ
ウインドのマネキン乱している色気

東大阪市 斎藤三十四

ロビーでは裏腹なことを云う
肩車の孫に夜店を指図され
通勤の車内海が呼んでいる
孫そそのかし冷蔵庫開ける

尾崎市 高津徹也

踏切番の消息は即我がロマン
追いかけてくるのは自嘲の咳ばかり
うつむけば何と淋しい靴音よ
誤解とけ力まかせに釘を打つ

和歌山市 小川佐知子

振りむかず来て愚痴多き日を恥じる
深呼吸してから社長室たたく
ありがとう素直に云えた日であれし
新調の服着る心春に似て

大阪市 津守柳信

意識して作句へ逃避する強さ
一日が短かく済んだ日のジョッキ
内密事しない女で欲もなし
停年があるから余生へかける虹

大阪市 室谷徹舟

ゆるがせて天下を走る大型車
腰弁も楽しからずや定退後
だから僕母ちゃん怖いて云うたやろ
夜勤終え疲れた影を連れて去ぬ

和歌山市 沢山福水

限界を悟ると狐ばかさない
死ぬるまでだまし通したガラス玉
わくらばの余生忙しき医者通い
水盤に立つ裏切りの葱坊主

貝塚市 行天千代

八卦も当らなかつた娘の良縁
七夕近し孫にこよりを造らされ
雨漏りの憂うつを消すリズムミカル
あじさいの男心に似た変化

鳥取県 鈴木村諷子

信ずればこそこの社会に俺も居り
氷山の一角へ寄る世間の眼
五体のばして眠る極楽ここにあり
身替りと思つて猫を埋葬し

高槻市 山田季賛

積木のような計画やはり立てて見る
ビル建つてから風の向きが変り
工事終れば紙一枚の宮仕え
長尺レール蛇のように動き

水見市 関美子

枯れざまもひまわりムチウチ症に逝く
ここだけの話 女の枕詞です
金ボタン親のメッキが浮いてくる
愚痴言えばゴキブリの歌かと言ふ返事

大東市 土岐トク子

ひまわりの何故かさからう花一つ
前途する息子に握手エアポート
友情が抱き合う西から東から
美しく老いて小さく会いにくる
(ひまわり映画をみて)
(別れ)

姫路市 梅谿庵 不醉

無駄と知りながら煙草の占める位置

大阪市 山川 阿茶

余は果報老妻未だに妬いてくれ
血統証付きも電柱にシッコかけ

勤悪い大人と赤児思うらん
陳謝する電話もとどかぬとこへゆき 故野迷路さん(二句)

馬鹿馬鹿と言うなおやじも馬鹿だった

口下手は天下一品だが男まえ

ラッシュアワー朝飯ぬきの顔顔顔

岡山县 直原 七面山

羽曳野市 塩 満 敏

訓示の後の口をぬぐいぬ

曲りくねった恋のあぜ道

声かけてみたい浴衣が阿波おどり
大阪のメンツをかけて渡御がでる

黙して語らぬ塔の礎

禁煙も禁酒もできず反対の署名

男が噴火し女も噴火す

保革伯仲天ぶら屋忙しい

仙台市 川 村 映 輝

神戸市 佐々木 静 泉

ほどほどに手綱をのばしてくれて妻

戦いすんで日が暮れて独り晩酌

実印の不覚わが家を落ち目にし
酔った時酔わぬ時の話喰い違い

雨降ってもちっとも固まらない夫婦

レイオフの父と遊んだ夏休み
思わくの通りすすんだ会議室

方言で飲める友達来てくれる

東京都 山 根 白 星

ライバルが赤にしたので白にする

目移りをお子様ランチさせぬ旗

籐椅子で刺繍の美女よ病みがちか

休耕田その儘ずるずる宅地成
兵庫県 河原 みのる

昼の風呂アルキメデスの原理など

東京に住んで失う句読点

他人の事故おもしろしと見る気ありやなし
ドラマでは薯剝くものとおぼえたり

小松市 馬 場 魚 山

出る釘は打たれるつもり意見出し
大阪市 神 田 秀 峰

祥月でない命日の花豊富
働いてきた人生の遠廻り

健康が喰べ歩き地図買い漁り
有名も無名も臍を出すモデル

東大阪市 桑原喜風

念仏に老後を託し良く眠れ

給料日女の派手な市場籠

手軽さに瓦斯を冥土に吸いたがり

宿毛市 山本窓花

恩人にされて催促切り出せず

鯛しよゆとりが欲しいと思う日日

追憶へ時効となった恋もあり

岸和田市 福浦勝晴

不景気をぼやいて飲まれて派手に酔い

砂丘から出てきた若い二ついのち

嫁ぐ日を指折り数えて編む毛糸

大阪市 藤田頂留子

此処がその連歌所跡か「みくじ」読む

宮入りをせかすポリスの野暮な声

即発の女の城に有る妬心

大阪市 柳原静香

石段に振り向くところありおぼろ月

ハミングの出る日もなくて老いている

娘の痛み我が痛みにて寝つかれず

唐津市 新岡回天子

熱帯魚飼えば成程金が要り

全没の句会忘れ物したようにたち

馬鹿言えと否定はしたがつき当り

和泉市 西岡洛醉

背信の目ざめどっしり重い悔い

紛争を余所に地球は自転する

流行語あなたわたしなのんなのさ

大阪市 福井多蘭子

病妻の愚痴聞き流すも看護なら

人間に馴染めぬ日には本を読み

新宮の社は稲穂の束の列

(伊勢)

尼 緑之助

雷もまじり悪魔の水となる

(豪雨禍)

天の摂理に人間あしらわれ

叩かれた大地へ太陽馳せ参す

爪あとの上梅雨明けの陽が光る

豪雨禍も斗争の場として動労

浜田久米雄

ありがたく受けよと夏の風が吹き

老骨になんの因果か鞭を打ち

この彩をこの艶を見よ備前焼

ありがたや平均寿命またも延び

在来の線は騒音には触れず

上席に坐り慣れてるご貫録

色盲に買われて絵具口惜しがり

膝小僧おもえらく長い祝辞だ

笑くぼの中でフアイトの火を燃やす

舶来が大好きです日本人です

正 本 水 客

ロープウェイ霧の重さだけ見て進む

まっすぐな入り陽に海は身もだえる

鮎の塩 頭からかぶる楽しさに

鮎まむし青葉の風のなかの昼

うどんすき梅雨の暑さに立ち向う

橋 高 薫 風

清しさは秋に衰え冬に死し

西成のシャツステテコは王衣に似

婦省子に地酒の味が真新らし

三日月があんなに光るのも勇氣

トンネルが遠くに見える秋の恋

北 川 春 巢

一年で病後終らず気が腐り

なまけ人間になって病気が直りかけ

さら服へ古ネクタイが見直され

新聞は小見出し週刊誌にくわし

ごきぶりホイホイの組立て譲り合って秋

川 村 好 郎

本田恵二郎

ペン走るだけ走らせ怒り解く

人間は甘し二十年のローン組む

ご老齡お大事にとはさびしいね

スケジュール明日のページは開かない

中ジョッキせめて心をあそばせる

西 尾 栞

雪月花金剛山は奥座敷

祝岳人君三〇〇回登頂(三句)

金剛山の御岳人の声である

葛城へ流れる雲の影を踏み

正弁丹吾父娘と見えぬ箸を割り

六十の恋も指切りして別れ

菊 沢 小 松 園

掘りおこす屍体乳房のあたりから

弱点があつてノックへ身構える

法治国縄一本に距てられ

火花散る零細企業という火の粉

うわの空で聞いてた意見が役に立ち

若 本 多 久 志

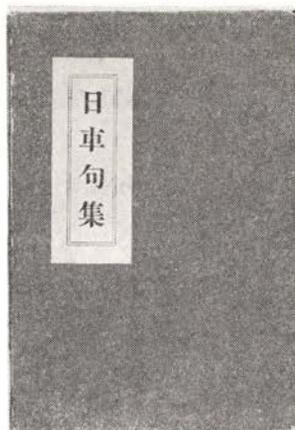
覚っても悟っても海の深さ哉

我ながら角がとれたと思う齡

負け惜み悠々自適とは淋し

限界を悟って今日もマイペース

ふと亡母を求めて三十三間堂



「日車句集」昭和31年刊

麻生路郎物語

—同志の人々—

(9)

東野大八

「土団子休刊のあとをうけて、大正八年六月「後の葉柳」を出した。「轍」「矢車」「雪」「土団子」と生命的な川柳の新しい運動に没頭していた私は、その頃日車君とともに、句だけを遺しておく意味から「後の葉柳」を出すことになり、それへ半文銭君も引ずり込んできました形である」(山雨楼メモ)

「後の葉柳は、樹型四頁の小さなものを三部だけ出して止めた。理由は小島紺之助君が出した「楊柳」の応援を頼れたので「後の葉柳」を犠牲にして句や柳論を「楊柳」に發表したのであった」(山雨楼メモ)

「楊柳」は「土団子」の誌名を変えただけの体裁で二十八頁建ての堂々たるものであった。創刊は大正八年二月、その第六号あたりから「後の葉柳」は同誌に吸収された形で、日車だけが同誌同人となり、路郎、半文銭は松窓を加えて社友となっている。なお顧問に浪花坊と柳珍堂の二人を迎えた。

「楊柳」の編集兼発行人の小島紺之助(本名市松)は、大阪府泉北郡大津町に住む地主の息子で、浪花坊の「大正川柳」の系列を標榜して紺前楼、紺前懸などの筆名で埋め草も手がけているが、柳文は生硬で句も

—見わたす限り海の柱にもたれけり
—斗わずして勝つあけがたの雲

といった傾向のものが多く、この紺之助が「楊柳」誌上で「古川柳抹殺論」の一大論陣を張っている。その中で久良伎を「宝曆六代の江戸っ子を自負し、その陳腐的川柳」のくだらなさを正面切ってコキ下ろしている。日車もまた「先輩無用論」で久良伎川柳に大ナタを揮えば、路郎もまた『若き川柳家に与ふる言葉』を書き、暗に久良伎流に筆誅を加えている。時に彼、三十二歳—短文なので全文引用を試みよう。

「柳樽はお前の求むるものの影に過ぎないと思え。それがこんなにお前の心をひきつけ

ようと、いつまでも柳樽に頼ってはいけません。頼るときにお前の句には命がない。そして柳樽の句よりも小さいものにしかならぬ。常にお前自身の力で、お前自身の句で柳樽を覆ふてやれ。しかしながら柳樽を読むことを忘れてはいけない。眼で読むことは避けよ、心で読め、読んだら直ぐに捨ててしまえ」
こうした論陣に頭にきた久良伎の手紙も

「楊柳」に載せられている。要旨次の通り。
「兄等の態度の卑怯なのはなぜ俳句や短歌に向って戦争をしかけないのか。川柳界に向ってグズグズいうわ短歌俳句のマワシ物にしかみえぬ。死んだ六厘坊はソレ迄に卑怯な男ではありませんでした。私は川柳家とし江戸趣味を保存し宣伝するの合理的なのを知って六厘坊と別れた。(中略)道を信ずる上は二つはありません。都市享楽の美に渴仰するワレラです。ケチなアリキタリの短歌や俳句でやっている思想(むしろそれ以下)をただ川柳

に移して新しがる連中、ソシテ古川柳にケチをつける連中に反対する。川柳に江戸趣味を再現する。様式の新古は問うところに非ず、私等は古川柳に對し侮辱を加ふる奴等は進んで刺しちがえて死せんとする位の意気を持っている。小子は現に郵船株一百株を川柳に擲ち、獻身的に川柳を宣伝する者故、ヘンなことを言つて川柳をソ害するものはドシドシやつつける。(日車死)

柳花坊流の新川柳を遵奉するその門流に於て、古川柳一辺倒の江戸っ子川柳の久良伎流とはもともと其の肌合いを大いに異にするわけで、紺之助も日車もその争点をふりかざし、相手を名指して罵倒する。その様を横合いから冷静に凝視しながら、わが道を往く柳界の一異材がいた。俳人鬼史こと松村柳珍堂である。路郎と柳珍堂の風交は「葉柳」以来で、「雪」「土団子」の同人から、路郎が「後の葉柳」を出した頃にも、路郎が持ちつづける結社大阪川柳社同人でつき合つてくれ路郎の同志の筆頭格でもある。

柳珍堂は明治十三年生れ、路郎の八歳年長で、死去したのは大正八年九月十四日享年四〇であった。「楊柳」の終刊はその翌年二月で八号で終止符が打たれた。柳珍堂の死が原因だとされている。日車は「楊柳」二六号で「柳珍堂の死」と題し次の様に書いてゐる。

「柳珍堂はつきよのうちに遺言をした。一、句集を出さぬこと。二、追悼会を営まぬ事。三、追悼号を出さぬこと。家族に対しては一、香奠を受けぬ事。二、葬式は血族のみに

て行ふ事。三、短冊類は一切焼き棄てる事。法号は死ぬ三、四日前自分で「黙操鬼史居士」とつけ只管死期の至るを待つていた。葬式の際、坊主がこの法号は法にないといつたが、この坊主こそ坊主ではない。黙操とは、四、五年前碧梧桐(河東)氏が柳珍堂に贈つた「黙操洞」の洞名から出ている。葬儀に碧師の追悼文が寄せられた。

柳珍堂が俳句から川柳に手を染めたのは、明治三十八年であるが、句は「葉柳」第一号から「番傘」「雪」「土団子」を経て「楊柳」で終る事になった。句風は古川柳を基礎とせる自然の順路から入り「雪」時代いやや変調をきたし、「土団子」時代において最もその個性を発揮し、「楊柳」においてその全人格を表現し、わが畏友は寂滅した。今日の大阪柳壇の人々は大なり小なり柳珍堂に刺戟せられ、啓発せられたことは言う迄もない。特に私はじめ当百、半文銭、路郎が故人に負うところが多かったと思ふ」

路郎も大要次のような悼文を書いてゐる。

「柳珍堂の死は日本の新しい柳壇の為に致命傷であると思う。思想の非常に進んだ、しかも表現法の最も巧みな同氏を失つた事は遺憾千万である。百人のやくざな川柳家を失つてもいい。千人失つてもいい、ある意味から言えば殆んど全部を失つてもいいから柳珍堂氏一人を生かしておきたかつた。この人がある時は友とし、ある時は師とも仰いでいた日車氏の落胆は想像に余りあるものがある。

— きれし日の昼の暗さを忘れかね

この旧作が出たとき私たちをどんなに唸らせ、嬉しがらせ刺戟したことであらうか」

日車はまた「酒少し飲めば淋しくなるものぞ」の題名で柳珍堂の死を書いてゐる。

「忘れもせぬ今年六月、雨のドシヤ降りの日、鯉魚と二人で彼を見舞つた時、柳珍堂は瘦せ衰えた体でムリに腹這ひ、今日は鯉魚君がいたことだから日車君の事について話しておきたい。僕ももう永くはないから、他日などとは言つておれない。二人ともよくきいておいて貰いたい。日車君は僕の知つてゐる人間の中でいっちょよい素質を持った男だが、第一に己惚れ心が強い。第二に野心から免れる事ができない。第三は軽はずみでいけん、どうぞ僕が亡きあとはこの点に気をつけて貰いたい。それだけいって疲れたから暫く失敬すると横向きになつた。柳珍堂と鯉魚の別る日はこの日となつた」

「楊柳」に連載された「柳珍堂句集」より

— 風呂場から胡瓜を揉んでおけという

— 執達吏蔵へ入つて眼がきかず

— 十四の春刺刀が欲しかった

— 鮎は焼かれ氷は鮎に似て残り

— 馬おのきて橋おののきて渡り

— 水引は掃き残されて臆が出る

— 脂手といふを姑が先に知り

— 酒するて女は蘭の花を見し

— 茶をかける時にみだらな目を遣い

— 北の空より我に迫りては消え去り

(臨終)

日車は明治二十年生れで路郎より一つ年長

である。路郎と六厘坊は同じ歳だが、日車は六厘坊とともに大阪の市岡中学の第一期卒業生である。日車が一年落第したからである。

日車の父は、この落第は川柳のせいにしての趣味を敵愾したため、その柳名七厘坊を日車と改めた。この七厘坊は、六厘坊より一ツ年上だからそうしたまでだという。

天才六厘坊と自称し、当百という出来のいい先輩すら手古ざつた六厘坊に対し、日車も似たような才子肌の男、二度も絶交を宣言しあい、そのたびに路郎と斎藤松窓が仲裁役を引き受けている。日車も六厘坊とともに商家に生れ、中卒後は、往時の仕事着である厚可姿で、川柳に血道をあげ「葉柳」誌上ではともにもその筆鋒を競い合ったものである。

筆者は本稿を纏めるに当って、必要資料を数多く眼を通す立場におかれたわけだが、次々とその資料を手にするたびに、眼をみはる思いにさせられたのは、川上日車と柳論の多彩かつ迫力に溢れたその作句論と柳論の凄じさであった。自らを天才に擬した六厘坊すら影をひそめ、路郎とても茫然としてその画中には無いのである。「竜眼よく鳳眼に点ず」で、柳珍堂としてその死の床で、若き日車への戒告に馳られたのであろう。

日車は昭和34年11月9日に死去したが、それに先だつ三年前に「川上日車句集」という小冊子を出している。大正三年から昭和三十年までの作句の中からわずか一二三句を抜き出した唯一の遺品である。その自序に言う。「人生の果てにたどりついた私は、これで

何にもすることは無い。ただ峻烈な世上の批判は、やがて一句も遺さず削り去つてくれるであらう」

この自らへの峻厳さに、筆者は死の床の柳珍堂の遺言や、彼への遺訓の陰をみる訳だ。

— 思わじと椿の花を火に焙べて 日車
— 土ほれば土 土ほれば土と水 //

— 賽銭も手にあるうちは只の金 //

この日車に見合う、若き日の路郎の同志がいま一人いる。木村半文銭である。

「萩の茶屋のころ、つい眼と鼻の先に半文銭君がいてくれた。毎日のようにお互いが往来し合つて、暇さえあればわれわれの主張について語り合ったものだ」(山階楼メモ)

木村半文銭(本名三郎)は、路郎より二ツ年下で六厘坊に兄事して柳号三厘坊。萩の茶屋のころは砂磔の仲間をやっていた。

「木村半文銭氏は貧乏と川柳を一緒にしている。惜しい男である」(吉田幸典書)

「葉柳」のころは、清新の気溢れる古川柳調であったが、「土団子」から詩川柳の傾向を強め、「後の葉柳」では生活苦が句の前面に押し出され、この廃刊とともにプロレタリア川柳とも称すべき悲惨な人生に没入する。

「大正十二年度のいゆる川柳革新運動に参加して以来、窮迫せる生活のどん底に沈みつつ、精神的にも物質的にも幾多の難関に直面し、あるいは家主より家を追われ、金貸より封印をうけ、妻とは別れ、住み馴れた土地を去り、三人の幼な子をつれて幾度路頭に迷うたかしのだ。この間、なお屈せず所

期の目的を貫徹するため、同志の陣営に拠つて文字通り悪戦苦斗を続けてきた」(「木村半文銭句集」(昭和8年刊・自序)

— 九尺二間の家の砂漠に秋の風
— 机— お前も明るい家に住みたいか

— 杖から死は一寸さきにある
— 生活のインクも残り少けれ

— 死の罫子をかけおける— ひとり

第一次大戦後の一大経済恐慌にさらされ、無産階級運動の吹きあれる中に、米騒動や、関東大震災、アナキストの虐殺、プロレタリア革命運動をめぐる弾圧、暴動の流血や、護憲運動をめぐる政局の混乱、農村では凶作飢饉、売られ行く娘達、奸商汚官の横行— そうした大正デモクラシーの暗い面皮の裏側で、谷底で「川柳」というかほそい灯を掲げて必死で暮しの怒濤と斗いぬく人たちが。

正常な世間の眼からすれば、正しくそれは風狂の狂の字が、やけにきわだち妖奇とも感得しているのかもしれない。だが、ひたすらに、川柳人は歩む、歩む。日車と半文銭はこうして、路郎の視野から遠ざかり、ついにかつての日の路郎の傍らに還ることはなかったのである。この二人によって新興川柳誌の旗手の「小康」は生れた。時に大正12年2月、同誌に現われた二人の作品傾向は次のとおり、

— 元日— 暮る
— 錫 鉛 銀
— 日車 半文銭

誹風柳多留廿五篇研究

一(七丁)一



岡田甫

室山三柳・紀内恒久・入江勇
青木迷朗・清博美・西原亮
八木敬一・鈴木黄・岡田甫

114 妻へふんごんて茶びんを欠抜る

室山―奥方、姫君など外出、もしくは大家の野遊び、花見などの際、茶瓶・炉など茶道具一式をもって従者が供をするのであるが、先を急ぐ時、そんな道具類を持った者で前がふさがっている時、道から麦畑へ踏み込んで、その横を駆け抜けるというのである。

降り出すとくそだと茶ひんまだるがり

一〇・二二

岡田―贅。茶瓶持は重いのでとかく遅れがちになるのだ。

115 霜月のけはひ十月髪をゆひ

室山―「十月の晦日八百五町麻」(七四・26)という句がある。寝られぬ三町は、堺・葦屋・木挽町。十一月一日は顔見世の初日である。当時の女性を外出することがほとんどなく、花見と芝居見物が最大の楽しみ。十月

三十日には髪を結いあげて夜明けを待っている。「けはひ」は、気分・ふんい気。

栈敷のハどれれも十月ゆふた髪

安元・宮1

八木―室山氏説に贅だが、十月の木葉髪といひ、十月木の葉の零る頃、頭髮の抜けることをいう俚語がある。十一月にはまた、毛が生える。「毛生え(い)」「十月髪」と、このことをかけているのではなからうか。考え過ぎですか？

岡田―八木氏、新解として有益。お考え過ぎどころか、そういう説が存在するから、「けはひ」などという語が用いられたものと思われまます。

116 太上天皇ばあ様のゆつりもの

室山―「太上天皇」は天皇が讓位されてからの尊称。略して「太上皇」「上皇」ともいふ。主題句の「太上天皇」は古い雛(の内裏

様)。もらってもあまりうれしくない。

おがむから出しなざるなと母の雛

一六・26

太上天皇とお袋同い年

太上天皇出されるが嫁苦勞

安七・松4

清―贅。母の雛でさえ相当に古い。それがばあ様のゆずりものとあつては古色蒼然である。岡田一同。

117 十両に目のないやつが点を打

室山―「目のないやつ」―盲人―検校。「十」の上に「点を打」つと「千」。検校は盲人の最高位で、紫の法衣を着し、両撞木の杖を許されるが、その位を得るためには千金を要したという。そのために、座頭から検校にいたるまで、そしてまた検校になつてからでも、そのいろいろの(特に金に関する)情景を詠んだ句にはさまざまの多い。老本の杖千金の道具なり

八・23

拾両へ座頭たうとう点を打ち
岡田一賛。 八・17

118 春や昔のどこふしから文通

室山—放蕩息子が勘当になつての謫所は下総国(千葉県)の銚子、というのが古川柳ので不文律。そこで彼は、

十三夜むす子はい所で眺めて居

明五・亀1

不孝の罪でいわし引く天の網

二六・15

後の月生たいわしで飲んでいる

拾七・4

という次第になる。かくなれば『伊勢物語』

の 月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

の歌もそぞろ思い出され、あの吉原という極楽世界(の花見)も昔の……、といった手紙を親もとへ送りたいもなる、というものである。

入江一賛。「月やあらぬ……」関係句、

春や昔に交らねど扱おえず

二一三・24

晴れぬ胸月やあらぬと打嘆き

安元・1105

春ぞむかしの虎の尾は香に匂ひ

四一・27

岡田一同。

119 百員のぬげがらを持ち三をかひ

室山—「百員(韻)」は「連歌・俳諧の百員から成る基本形式。初表八句、初裏一四句、この表一四句、この裏一四句、三の表一四句、三の裏一四句、名残の表一四句、名残の裏八句から成る」(『新潮国語辞典』)。

「三」は三絃(や、その三の糸)も考えられるが、ここはやはり昼三だろ。でなければ三回目。

へエけエに行くことむすこ八内を出る

拾四・22

で、そのまま吉原へ……。もしくは、心もよそに俳諧の座に出てその後にと、「はいけいをするをやりてハあざわらひ」(拾七・4)と廓内の光景とも見られる。ただ、昼三・三分を「三」と表現した句が見つからず論証できない。「三(三分)」に俳諧の三の表、三の裏をきかせた趣向と思うのだが……。「ぬげがら」は蟬や蛇などの脱皮したあと、転じて、本心を失なつた人、ここではそれをにおわせて、俳諧に使う懐紙のみは持っていることをいうのであろう。

裏うつりハさう三のおもてばばあ

第一・11

三のおもての人倫ハもてる也

第一・21

あたりの句からみると、三回目の方がよいかも知れない。

入江—遊女の欲心を買うため、小道具をつかう軽薄な男を詠んだ意に賛。ただし、「三」と小道具としての「百員のぬげがら」がはっきりしない。

百十三人の女性にアタックし、八人の女性を殺したかの大久保清センセイの白いクーペの中にも、文学書や詩集、大学の制帽、使いたくないスキーが乗せてあったという。

八木—俳諧用語でまとめた句であることは確かだが、「百員のぬげがら」がはっきりしない。清—昼三としたい。

岡田—これまた難解句。俳諧を行うときは、

前句に対する付句を幾つか考えて次の人に廻す。次の人は、その内の最もすぐれた句を選び(三句ならべてあれば一句に印をつけ)、付句を何句か考えて次の人へ廻す。宗匠が加わっていけば、宗匠が各人の作の秀吟を選ぶのである。そして最後に、清書して百韻が形成される。百員となると相当の時間がかかり、何日もかかる場合もある。とにかく「百員のぬげがら」とは、秀吟が選ばれ、残された作句の反故紙であろう。さて駄労解を申せば、それを「持ち三を買ひ」は、オレは俳諧をやっているんだぞ、というヒケラカシで、「三を買ひ」はやはり昼三を買うということになろう。昼三あたりの上妓は、書画や和歌俳句などを、江戸一流のその道の師から教えられ教養がある。それだけに、客も、いかにも趣味教養のあるところを見せる必要がある。もちろんそういうヒケラカシをする必要があるだけに、この客の教養は大したことはない、という事にもなる。ただし、以上はボクの駄労解で、おそらく異説が出てくることと想っている。



路郎賞
川柳塔賞

候補作 中間発表

自五十年五月号
至五十年八月号

路郎賞候補作品

正本 水客

(到着順)

北川 春巢

西尾 葉

ダムの水抱かされて山 腑に落ちず

大矢 十郎

台所コツコツ春を刻む音

堀江 正朗

すねているように老婆の草むしり

越智 一水

屈辱は拇印の指を押さえられ

山根 白星

たっふりと黒髪洗う花曇り

羽原 静歩

意気地ない姿で振り止ってる

森田 カズエ

いたずらっ子のように鉢から新芽出る

不二田 一三夫

人の眼に指をつっ込む記事で売り

中村 ゆきを

留守居の嬉しさ何しよう そんな日も

錦織 文子

輪になって手をつなぎたい地藏さま

谷 のぶお

石地蔵わたしも動けないのです
併せと思えば足りる箸をおく

小野 克枝
河股 緑水

血圧は葉で下げて飲み続け
福祉行政手袋片方足袋片方

小西 無鬼
本間 満津子

大根を干して淋しい道しるべ
春の精夫婦の手などつながらせる

香川 酔々
柳原 静香

適材適所と左遷いたわれ
併せらし声に白髪も生えてない

小林 由多香
岩田 美代

要求がまだ通らない結跣踏坐
タンポポへ蝶は道順聞きに寄り

工藤 甲吉
斎藤 三十四

冷奴もう七人の敵はなし
家計簿の悲鳴が妻にだけ聞こえ

羽原 静歩
両川 洋々

若本 多久志

悔のない汗千金の夢追わず
一坪の庭にも無限の空がある

林 瑞枝
都倉 求芽

父の椅子座れば父の温み
アイシヤドウ泣かぬ女にしてしま

河股 緑水
川上 大輪

回転の早さは笑顔にすりかえる
いにしえや樹下石上は雨の彩

中川 滋雀
山本 素郎

生きのびて何をかこたん葱坊主
朝配る少年朝の街が好き

吉田 水車
岩本 雀踊子

藤に竹つ喪服のすみずみまで女
冷奴もう七人の敵はなし

三宅 不朽
羽原 静歩

老いの惑い愛の言葉の重み知る
忍従の土間ほの暗き文化財

和田 維久子
時広 一路

郷に入って男汚れた酒も飲む
にっばんが禿げて来たよと渡り鳥

阪上 十止庵
稲田 豊作

万物の霊長なんて云うから狂るうんさ
友達の目が同性の目に変り

神谷 凡九郎
小出 智子

行列は崩さず羊歯は列ぶもの
女の直感へ落着いてみるほかはなし

西 いわを
遠山 可住

常識が出たばっかりに失いし
ノックして入ってくれと子に云われ

岩田 美代
森田 カズエ

五十坂ある日ある時ある焦り
社運隆々飼いならされて株をもち

玉置 重人

山内 静水
着てくもならないからあんた行つて来て

関 美子
智恵寺と聞いて子供とひき返し

中村ゆきを
京の町エリザベスさんきはったで

室谷 徹舟

菊沢小松園

ひきながらひきながら潮満たんとす

八木 千代

アイシャドウ泣かぬ女にしてしま

川上 大輪

ハンカチの白さへ負けたなと思う
アルバイト今日は共産党へ行き

山川 阿茶

ひとときの天下を取らず夕桜

森井 善居

陶然となればこの世も捨て難し

工藤 甲吉

虹が消えたあとに別れがあるばかり

小浜 牧人

雑巾で顔をふくよう誤字当字

香川 酔々

川村好郎

川口 弘生

自分から刺しには来ないバラのとげ

宮西 弥生

身を守る女に鍵は一つです

河野 君子

しきたりと義理で重たい下駄をはく

黒田 真砂

置酌ぎの酒積然とまだしない

山根 白星

御香奠と書く他人ごとの墨をする

阪上十止庵

足元を見よとは下り坂のこと

西 いわを

マイペース春のペタルは焦らない

野坂つき子

紫陽花の心の彩を聞いてみる

岩田 美代

十枚目のお札は別れの音で読み

中川 滋雀

憧れがとどかぬ虹で美しい

島居 百酒

身を守る女に鍵は一つです

宮西 弥生

やりくりをつけたら俺が消えている

野村太茂津

川柳塔賞候補作品

戸田古方

尼の爪やはり女としてのびる

梅本登美也

錆ついた錨は海に戻りたく

小谷 葉子

喉通る時柚子の香りがしたような

江口 度

好きな酒で唇拭いてやり

有田鹿の子

はりつめてはりつめて風船われる

香川亜成

落のあくちよびり匂うお湯の宿

小山内貞男

見通しがよいので事故が多発する

堀江蓮露

子の便りばかりとおちた酒の券

小林 節

反抗は毛虫の頃の話です

高橋 古啓

いいことを聞いて口下手それが出す

大林曲ん手

大坂形水

揺れる乳気にせず女夏駆ける

横地 正彰

尼の爪やはり女としてのびる

梅本登美也

少し笑つて欺された事にする

小谷 葉子

謝りに行けば赤チンでもう走り

岸田豊年次

呼びにやる子供つぎつぎ帰らない

江口 度

同病で逝つた話をふせておく

羽田 一扇

生きること教えてくれた人が辞め

島田昭治

遠吠えが記憶の底にこだまする

松本 文子

ヒョロヒョロと伸びてマンモス団地の樹

堀口 欣一

子燕に野良へ出る戸を閉めきれず

岩下照沖

老齡年金これが金脈とは淋し

秋月 安方

横顔は落花の舞いの中にある

岩崎 実

落城の哀史へガイドの七五調

西田 朋子

不器用な恋を青春とも思い

桑原 道夫

花を摘む一つの愛が芽はえそう

小谷 葉子

上役が秘かに神経科へ通い

柴田恵美子

重役と話せば部長聞きに来る

渡辺伊津志

墓に来てあなたの孫は頼母しい

船越 洋之

嘘一つグサリと扶る林檎の芯

岩下 照沖

二枚舌それでもたらぬ票の数

岩田 三和

橋高薫風

水煙抄

菊沢小松園選

豊中市 高橋古啓

誘蛾燈そこに溺れる愛を知る
髪を切るきのうの夢もおととも

何もかも水に流して管つまる

たんぼが恋をしましよ別れましよ

永遠の愛を誓って再婚す

岸和田市 池田露子

路地裏にかごうぐいすの声すずし

主婦せわし免状どれも役立たず

胃袋がもう一つ欲しいバイキング

まっ直ぐに歩けば埃立つ浮世

河内長野市 井上喜酔

自動化になっても料金また値上げ

ローカル線谷間の霧が迷い込み

仏壇の朝夕先祖へてんこ盛り

なにげない顔に今度もしてやられ

大阪市 野村白風

置き物の九官鳥は喋らない

藪入の波ひき元の差向い

本物の壺は見せない御園帳

国政の破れ繕う針がない

柏原市 小谷葉子

ポッケが四つ願いを四つ詰めておく

あの人の射程の中で泳がされ

両手を振れば素直に別れが出来そうで

私だけに咲かす火花が売れ残り

愛媛県 小山悠泉

アンケート僕なら妻を信じます

過去はなし今の貴方が好きと言う

肩書が重荷になって来た落ち目

梅雨明けて七月暑さ東で来る

吹田市 藤原世史春

笑いたくないのに笑ったわれを恥ず

節約とケチとをうまく混ぜ合わせ

深夜には深夜の音律 犬が吠え

男気は酔ったあの時あの日だけ

岡山県 船 越 洋 之
 複合汚染雀チユンチユン鳴いている
 給料の話はしない友が好き
 噴水の飛沫にふれた待ちぼううけ

尼崎市 中 谷 利 美
 成仏をした貌でなし冷凍魚
 親バカと見ておもちゃ屋の売らんかな
 崩したら書けるに辞書がある楷書

豊中市 安 藤 寿 美 子
 成長期みたいにスカート丈を出し
 冷飯を犬とわけ合い一人の夜
 わが道を行けば矢も降る槍も降る

大和高田市 岸 本 豊 平 次
 ローンだけつきあい銀行マッチくれ
 騙されたつもりで買えと買わされた
 八月十五日の涙言っても判らぬ子

東京都 宮 崎 美 津 子
 甥夫婦に長女誕生(二句)
 五体満足産婦の眠り深々と
 若やいでリズムに乗ったその祟り
 マイホーム叶ったローンの重たくて

八尾市 納 史 葉
 首輪もう不用の犬で雲に乗り
 洗濯機の中まで夫婦もめ続き
 償いの女が磨く鎖です

大阪市 小 谷 清 女
 真似してもやっぱり個性顔を出し
 似たような愚痴持ち寄って養老院
 孫に手を振って私の城めざす

尼崎市 小 林 文 月
 傘寿を迎えて痔になやむ(一句)
 医者看護婦他人なれどもイキが合い
 病半ばの誕生日(二句)

大阪市 堀 口 欣 一
 末の孫見舞か祝か知らず居る
 病中でも赤飯があり鯛があり

大阪府 有 働 芳 仙
 外国課全員揃うカラーシャツ
 食券となって京都の味気なし
 大原女も日雇もいる加茂河原

熊本市 岩 下 照 沖
 霊柩車死人が起き出しそうにゆれ
 見晴らしのよいほど家賃安いビル
 日の丸が出ていませんよいらぬ世話

唐津市 尾 崎 泰 山
 蠅叩き持つてることを蠅知らず
 動き出す気配の蝦蟇に後しざり
 髪撫でて撫でて勇氣のない男

尾 崎 泰 山
 鳩の糞除き王女の列を待ち
 漫画見ているとは知らずに茶を運び

遠慮している間に氷とけてくる

名古屋市

大林 曲ん手

地上権ないから動くかたつむり

何にしても指は五十の動きよう

白百合の白さに耐えて病んでいる

寝屋川市

江口 度

台所主婦も過保護になつていく

西成の不況を暑さみつめてる

七夕の笹のすて場に夢もさめ

和歌山市

樫村 ふみよ

鉄の手上げて花から笑う顔

やさしいこと言うて出た夜は気にかかり

さよならのうつろ夕日も落ちてゆく

新潟県

高野 不二

聖職の顔をちよっぴり参観日

領収書の様に推薦者が並び

赤旗に同感出来る記事もあり

和歌山市

桑原 道夫

野良犬になつて交通信号おぼえ

盲導犬親分様のお通りだ

霊柩車よ止まれ救急車が通る

松江市

梅本 登美也

水枕夢は曠野を駆けめぐり

庭石のささやく方に芽がのびる

養子今日酔つて云いたいことを云い

八戸市 安田 絃

ワキ役の妻の演技に生かされる

もの指しを片手にヤングの気焰きく

眠るにも税金かかる宿で酔い

今治市 古野 伶人

架橋点結構繁昌する茶店

観光の客へ渦潮牙を見せ

今治市 今井 松花

リーダーに続け続けと暴走し

田舎へは還らぬ恋をする女工

今治市 真山 国彦

母の顔見てから入る試験場

男湯で洗い女湯で着せてやり

今治市 伊藤 一郎

調理師の嫁に台所明け渡し

一本釣り高速艇にゆさぶられ

今治市 大本 バット

クーラーが利いてるだけでまずい店

目が眩むような暑さで梅雨明け

大阪市 新川 貞祐

喫い慣れた莫にも美味しい日苦い時

呆けたのが長寿の秘訣なると述べ

大洲市 宮尾 みのり

人生相談すがりたいたいの策が無し

プライドを真綿でくるみ女の輪

ジャン拳で決めるチャンネル8と10
こんな日もあってパチンコ止められず

広島県 原 田 篤 史
鳥取市 勝 山 紫 宏

収穫を複合汚染の目で見つめ
眠れぬ夜動悸の強さ手で測り

尾鷲市 渡 辺 伊 津 志

振り上げた拳冷たく見つめられ
囁託という職がある気を張ろう

羽曳野市 麻 野 幽 玄

偽りを書かない筆は素直なり
うまず女の責は他人の子を抱かず

竹原市 鈴 木 かつ 子

鍵っ子に雨がうれしいママがいて
言い訳けをすればするほど出来る壁

泉佐野市 大 工 静 子

アメリカカ旅行にて

金門橋バスより早く霧がくれ
ナイヤガラ瀑布がうなる水煙

鳥取県 福 田 保 子

ふくらんだ子の胸生理も教えとき
故郷の水は心の中で澄み

高槻市 竹 内 花 代 子

藤あやめ女へ花の旅つづく
御見舞の西瓜が嬉しい腎孟炎

点滴も地球の引力知っていた
十文半の靴をセンチで買わされる

姫路市 大 原 葉 香
尼崎市 大 垣 たもつ

不惑の恋外堀までとわきまえる
如才なく一本提げる奴が抜け

岸和田市 池 田 香 珠 夫

今舞うた舞妓が帰る蛇の目傘
ゆずられた座席に若い娘の温み

高槻市 山 田 スミ子

てのひらの温みも投げる御賽銭
週休二日日給制へよくびびき

竹原市 鈴 木 かつ 子

梅雨あけの雷雨へいそぐ市場がご
すこやかに育てと祈る鯉のぼり

東大阪市 崎 山 美 子

重い程薬も入れた旅仕度
七人の敵むかえうつつ身づくろい

松江市 本 庄 快 哉

雲流る日本が負けた日を想い
表札は姓のみ番犬いるらしい

和歌山市 西 山 幸

子供より親が夢中のプラモデル
酔ってきた無口がそろそろしゃべり出す

新潟県 市 川 一 峯

タクシー代値上げる程客が減り
反対も賛成もせず飲んで居る

寝屋川市 柴田 恵美子

ぬるい湯が好きで色気のある女
髪の香に老若があり髪あらう

七尾市 松高 秀峰

成功の資格の様な苦勞人
落ちついて話し本当に市長の座

倉敷市 高山 みどり

血となれやトマトジュースは絞りたて
おいらん草頭飾りもあでやかに

鳥取市 有田 鹿の子

傷心の我に孤独の波が寄せ
アジサイは七変化して遂に枯れ

滋賀県 柚木 踏草

運命線どこかに幸福駅もある
経営の穴へ貧乏神が住み

西宮市 朝山 千世子

あじさいにロマンの過去が甦える
濡れつばめ過去の情事は咎めまじ

三重県 川上 富子

苦しみをすべて打ち消す声で泣き
添寝する母確かめる児の目つき

新宮市 大矢 とよ子

やんわりとエリート社員叱られる

あいにくの雨が逢わせてくれた人

島根県 飯塚 虎秋

そこはかとなく心の揺れるおぼろ月
倅せな顔よ魚拓の墨をする

鳥取市 岸本 無人

包帯が取れたら誰も見てくれず
退院の明日という日に見舞客

羽咋市 三宅 ろ亭

大の字の昼寝一畳の別天地
苔蒸した墓に祖父の息吹き聞く

寝屋川市 福富 隆子

父親の方が乗気の兜虫
世帯慣れしたか梅漬言って来ず

島根県 谷岡 芳枝

這い出せば毛虫も後へひけぬ性
包丁の錆びたかろうな切れすぎて

諫早市 江副 二牛

知らぬまに恩師の癖がついて居り
親の夢詰めて重たいランドセル

鳥取市 小杉 紀子

遠慮したつもりの酒がよくまわり
好きだった花亡き父へたと活け

鳥取市 平井 節子

家庭科の好きな女が売れ残り
踏まれてる砂紋へ明日の風が抜け

方言で国の母には話しかけ
鳥取県 森 田 一 笑

詩人らしい顔で砂丘に立って見る

八戸市 島 田 昭 治

未だ苦勞足りぬか若く見てくれる

あばら家に誠実の額かけて居り
大阪市 平 井 露 芳

新幹線不急の客も乗せており

臍までで雷様は真面目なり

広島市 林 野 晃 之

ポーンでやっとな赤字を消す暮し

海浜へ女の性を競い合い
高知市 竹 崎 寛

出会いとは不思議挙式始まりぬ

波あれどかきわけてゆく旅立ちか

島根県 堀 江 蓮 露

焼跡に無心の虫が鳴きつづけ

道問えば少年標準語で答え
兵庫県 高 橋 近 江

這うていく虫でもわたしに違いない

病む妻へ俺より多い見舞客
鳥取市 大 塚 豊 生

東京の水に馴染めずUターン

安物は置かず老舗の暖簾継ぐ
弘前市 小山内 貞 男

ハチ巻が勝ちとる米価とはかなし
聞き上手心の中をうまく読み
新見市 吉 田 落 猿

庭のある家に住みたいと妻は縫う

死ぬ死ぬと言うて長寿へ願かける

大阪府 松 本 甫 久 路

割り切れぬ出来事のまま明日へ生き

負けるものか俺はあの時死んだ筈

唐津市 山 下 勝 一

靴持ちしている方が大学出

停年のない天皇がお気の毒

唐津市 三 浦 ひろ 坊

黒ンボ大会親のない子が一等賞

賞与とはストと怒号で取るものか

今治市 園 部 正 則

灯台のあたりは魚のよい棲みか

座りこみ組合だけのものじゃない

島根県 松 木 文 子

思慕ひそと匂袋にしまいこみ

ためらいの合わせ鏡がゆれている

大阪府 横 地 正 彰

落葉と語れる老いが今日も掃く

台風が来たと釘打つだけの智恵

唐津市 田 中 三 男

浮草にヤンマの夫婦ひと休み

人間の破滅を「むつ」は持ちあるき

鳥取県 加藤

藤 茶 人

不機嫌も妻の手品で笑わず気

尼崎市 駒村 岳 麓

口説きたいきっかけもなくすれ違い

橿原市 西本

保 夫

道祖神子等輪になって遊んでる

堺市 堀 畑 日 々 子

平社員どうし会社への長い道

伊丹市 樫谷

漫 柳

新調の傘に子供は雨を待ち

和歌山市 吉野 久 子

逆って建てたホームに親呼ばれ

大阪市 村島

秀 村

割り切れずあきらめきれずに嫁きおくれ

富田林市 中村 優

梅ぼしも赤く色づき愛される

大阪市 須浦

つ ね

枯すすき昭和不況でまた流行り

宝塚市 吉田 とんぼ

百姓が野菜買うとは世も変り

大阪市 内藤

ますえ

掛ふとんとつくに落ちてる子のベッド

島根県 岩田 三 和

黒わくの写真時々夢に見る

大阪市 花田

繁 子

寶石は石ころよりもなまけ者

名古屋 吉田 文 枝

エプロンママ喪服姿を見直され

唐津市 田口

虹 汀

新聞よりチラシの多いボーナス時期

堺市 栗本 藤 持

夜の蝶などと呼び名は美しい

唐津市 岩崎

実

大安日流れ作業の忙がしさ

新居浜市 横山 美 佐 子

田植女の髪つくろいし道路鏡

赤穂市 谷口

赤 童

加東大介ガンで死去

吉野市 西田 薄 子

どの川の河鹿も蛸も申しわけ

青森県 荒田

つ る

ギューちゃんて売り出し大ちゃんて親生まれ

岡山市 西田 薄 子

むきになる若さがあった日の日記

出雲市 藤井

晴 月

あした逢うサヨナラなのに涙ぐみ

堺市 檀野 茂 子

さわやかに生きようあしたへ夢つなく

・同人吟・

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

紫陽花の心の彩を聞いてみる

岩田美代

紫陽花を借りて人の心の真の姿が聞きたいと詠んでいられ余韻のある女性の句らしい佳句である。

あじさいの今日咲く色も嘘でなし

川口弘生

紫陽花のその日その日の出来ごと

高橋夕花

前句の解答という句で、喜んだり、悲しんだりするけれど、それぞれ一途に生きる偽りの無い人間の姿であろう。夕花さんの句も面白い着想でよい。紫陽花を見てもこれだけの違いがあるとは人生面白しである。

老いの惑い愛のことばの重み知る

和田維久子

餅みかも知らぬが老いるにしたがつて、除

け者にされた気になり、誰かにやさしい言葉を掛けられると無上によれしい気になるものである。それでもなおほんとうの愛の言葉だろうかと惑うのが老いの哀れさだろう。

面白く生きやすい女の中ジョッキ

岩本雀踊子

女の飲みたくなる時は嫉妬か、失恋であろう。そんなビールは飲みたくない。そんなもの飛び越して面白く生きたいと一息に飲むビールはうまい。中ジョッキが効いている。

風ちよっと吹けば別れ別れになる雲か

不二田一三夫

会者常離とは知っていてもちよっとした事件でちよっとした感情の行き違いで別れねばならない人の世を歎かざるを得ない。しかし又風ちよっと吹いて相会うこともあるのが雲であろう。

憧れがとどかぬ虹で美しい

島居百酒

最近ある中年の男性に思いをかけている女性に会う機会の橋渡しを頼まれた。それが成功して数度デートを重ね、或は結婚の媒介も頼れるかと期待していたら、別れたという。遠くながめていたうちがよかったと打明けられた。何事も憧れがとどかぬうちが美しいのであろう。

費うからなくなる金の面白さ

高杉鬼遊

こう遠視すれば人生もたのしい。しかしどんな金が入って来たか、どんなにして金を手に入れたか、何に使ったか、どんな金の出方をしたかが問題でそこから悲喜劇が生れるのではないだろうか。

十枚目のお札は別れの音で読み

中川滋雀

面白い着想である。あのパチッと音がして色々の愛憎が生れる。銀行員が上手にパチット音を出しているがこれほどあじきないものはない。

倅せと思えば足りる筆をおく

河股緑水

不足探せばきりが無く、よくもまあ上手に不平不満ばかりさがし愚痴の人だと思ふ人がある。人からどんなに見られてもこんな人は不幸な人と云わねばならない。不足もきりが無いが喜びも探せば幾らでもある。今日の汗を感謝し、食事の出来たことを喜んでこの作者は幸せである。この句主が川柳に打ち込み進んでこられているのをうれしく思っている。

父だけが父の日ちゃんと覚えてた

傍島静馬

これも結構、父の日は父の名にふさわしい自分であろうかと父の反省日であると言った人がある。本当の敬愛される父でありたい。

百人一首と川柳 (15)

富士野鞍馬

八重むぐらしげれる宿へ女衞来る

縁どふき人こそ知らぬ八重葎（曲水（二〇一）36）

などと詠んでいる。

集馬（八八六）

四八 源 重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ

くだけて物をおもふころかな

（詞花集）

源重之は、清和天皇の皇子貞元親王の孫に当る。父は侍従兼信である。父の兄參議兼忠の養子となり、康保四年（九六七）左近衛権将監となり、長保三年（一〇〇一）陸奥守となつて、この年、任地でなくなつた。三十六歌仙の一人で、家集に「重之集」がある。くだけでも割れても定家百に入れという川柳は、崇徳院（七七）の「われても末に」と並べて詠んでいる。

また文句取りで

風をいたみ鼻に持たせる袖頭巾

（拾四一）

がある。

四九 大中臣能宣朝臣

御垣守衛士の焚く火のよるは燃え
ひるは消えつつ物をこそ思へ

（詞花集）

四六 曾根 好忠

由良のとをわたるふな人梶をたえ

ゆくへも知らぬ恋のみちかな

（新古今集）

曾根好忠は、花山天皇の頃（九八四—一六）の人で、平兼盛（四〇）紀時文、清原元輔（四二）等と同じ頃の歌人である。家柄もいやしく丹後掾で六位であつた。歌人として強い自信を持っていたが、狷介で、人づきあひが悪るかつた。その当時の人から「曾丹」とあだ名されていた。しかし好忠は、当時の歌風にあきたらず革新を企てた。その革新は内容にまで及ばなかつたけれども、表現に新しさが見られる。その新傾向は次第に発展して、「新古今集」に至つて完成せられた。在世中はあまり認められなかつたが、没後、高く評価された。中古三十六歌仙の一人で、家

集に「曾丹集」がある。

猪牙船は行衛も知れた恋の道

（集馬（六一）6）

由良の戸を明る工風は雪の竹

（平洗（二四〇）11）

という文句取りの川柳がある。

四七 惠慶 法師

八重むぐらしげれる宿の寂しさに

ひとこそ見えぬ秋は来にけり

（拾遺集）

惠慶法師の伝はわからない。花山天皇の頃の歌人で、平兼盛（四〇）や紀時文らと交遊があつたらしい。中古三十六歌仙の一人で、「惠慶法師」集がある。

この歌に対し川柳は、

八重むぐらしげれる宿のぶせうもの

（拾初22）

これを川柳は、

宇治の火も衛士の焚火も昼は消へ

艶里(五六二五)

夜は衛士の庭に来て啼火焚鳥

寛舎(二四〇〇)

地黄丸昼はのみつつ夜はきえ

(拾三五)

と詠んでいる。地黄丸は強精補腎薬である。

能宣は藤原氏であったが、神祇の事を司つ

たので「中臣」を称したのを、のちさらに

「大」という称詞を加えて、「大中臣」と称

するようになった。村上、冷泉、円融、花

今治市 月原 宵明

忍従の限界が来た糸切歯

猜疑心スローピデオでもう一度

中三の浴衣の線はもうおんな

一角が崩れ落ちそう紅を塗る

大洲市 米沢 暁明

九分九厘あてにしてないから気楽

茶番劇みたい粗末な会終る

短所にもふれていよいよ好きになり

岐阜市 市川 鱗魚

農夫地に話言葉を考える

山、一条の諸天皇に仕えて、位は正四位上ま

でのぼり、正暦二年(九九一)七十才でなく

なった。「後撰集」の選者である。この人も

三十六歌仙の一人で、勅撰集にも多くの歌が

のせられ、家集に「能宣集」がある。

五〇 藤原 義孝

君がため惜しからざりし命さへ

ながくもがなと思ひけるかな

(後拾遺集)

藤原義孝は、謙徳公伊尹(四五)の子であ

り、行成の父である。冷泉天皇に仕え、若く

思想なき老骨ちゃんと出す国旗

画廊だからいいんだ裸婦の前に佇ち

悪夢とは思いたくない天皇旗

東京都 池口 吞歩

同権に夫専務で妻社長

同権の女に力こぶがない

同権に生理休暇が腑におちず

今治市 長野 文庫

七月の日本野球の記事ばかり

有権者馬鹿にされてる市民党

工場閉鎖喧嘩相手はすでに無し

辻褄を上手に合わす政治力

て右近少将にまでなったが、天延二年(九七

四)痘瘡にかりり二十二才でなくなった。

幼ない時から和歌の才によって知られ、中

古三十六歌仙の一人で「義孝集」がある。子

の行成は名高い書家である。

孝のつく二人どちらも君が為

光孝天皇(一一五)の歌も「君がため」であ

る。また文句取りに

君が為おしからざりし指の先

と遊女の指切りを詠んでいる。

語鳥(六八八)

作

近

愛染帖

橘高薫風選

失意の日身を投げけるよに百合が散る
野仏の頬をくすぐる萩の花

高槻市 若柳 潮花

船渡御にもまれ夜店の灯にもまれ
華やかな思い出ひらく舞い扇

倉敷市 水粉 千翁

さかすきを重ねて素顔取り戻し
なみなみと酌いでくれます妻の芸

大阪市 小出 智子

風呂に水満たすようにはいかなないぞ
母を憎みこれが絆と言うものか

大阪市 神夏磯道子

その愛は二重扉の奥に入れ
若い日の苦勞礎石として残り

今治市 原田 一風

妻既に女に非ず冬の夜
腕時計はずし散歩の下駄を履く

東京都 山根 白星

人妻となり消息をふっと断ち
会社にもある居留地と番外地

今治市 伊藤 一郎

嫁ぐ娘のタンスの金具よく光り
ふるさとを山の彼方の側から見

和歌山市 桑原 道夫

だれもいないとき少年毬をつく
籠の鳥逃がしてやるもエゴイズム

鳥取県 堀江 芳子

夕焼けへ走れば何かを掴めそう
朝顔のここにあそこにこぼれ種

今治市 今井 松花

赤字線芒の中を写される
孫二人あつても母の側で寝る

富田林市 岩田 美代

夏雲や私の賽は汚れすぎ
黒粋のがきがポトリ疎遠から

八尾市 宮西 弥生

逆境を耐えてる鼓動の音たしか
計算違いのままできた割勘

岡山県 白岩 文衛

五十才わが過ちの多ければ
民家集落博物館

竹原市 森井 善居

病む犬にかゆ炊け椎葉の家は昏れ
蝶ネクをきりりと詐欺師隙が無い

八尾市 高橋 夕花

番茶ごくり凡夫理性をとりもどす
ひとしずく胸に残して梅雨が去る

岡山市 行本みなみ

花の樹に叛いて花が咲いている
よく見れば尺取り虫の歩きよう

鳥取県 鈴木村諷子

雑談のうちに弱味を補強する

鳥取市 勝山 紫宏

亡き人が思い出されるねぶた笛
北の潮騒亡霊の声もする

香川県 三井 酔夢

押しピンの穴の数ほど汚れたり
枯魚が泣くむかしむかしの恋の河

八尾市 香川 酔々

囃りの狸は今日も徳利をさげている
格子戸の町旅人は通り抜け

大阪市 河野 君子

亡母を語れば座りだこが疼き出す
胸の穴を塞ぐペンダントが揺れる

大阪市 正本 水客

紫陽花かたまつて霧の重さに負けていず
鬼の面つけた昔を持っていて

竹原市 三宅 不朽

手花火の母が子がいる原爆忌
原爆忌読経マイクから流れ

大阪市 宮尾あいき

和歌山市 若宮 武雄 窓伝う雨に心を静められ

十二時を過ぎた受話器に試される

大阪市 新川 貞祐 考えが考えにならず白昼夢

復元の宿場にジーンズも蟹も出て

名古屋市 大林曲ん手 限界を尽して消える虹の性

水の味まだ生きられる生きられる

今治市 大本バット 一万円の紅買金がない金がない

阿蘇覆う雲は地底の溜息か

今治市 古野 伶人 風鈴の好もしい音も風の向き

寸借は返さず指輪買うている

松江市 梅本登美也 雲ながれ療舎の肋思想めく

壁落ちて出稼ぎ村に雪積る

大阪市 川口 弘生 男の好きな道に地雷が埋めてある

医家なれば薬師如来の首も掛け

名古屋市 吉田 水車 子の巣立ち孤独な夜の書をめくり

逆ろつてもじつとしてても風の感触

羽曳野市 麻野 幽玄 二人の絶唱で花が開いた

空席は一つ隣りに居る酒豪

岡山県 長尾 保 初対面だが信じてもいい微笑

巣立ちした部屋子の匂いまだ残り

東大阪市 竹中 綾女 毒舌をさらりと受けて座を丸め

好きな事してると耳鳴り気にならず

今治市 園部 正則 ご機嫌の良い母の音父の声

弁当の手作り厭う母かなし

池田市 杉田絵巳子 ネクタイの赤の好みは妻のもの

太陽を追う向日葵となり暮れる

守口市 野呂 右近 なれたならなりたい記憶喪失症

京都市 松川 杜的
8ミリへ成程父の猫背なる

大阪市 西出 一栄
誰がために紫陽花幾度の色直し

富田林市 和田維久子
小石ひとつ心通えと池に投げ

尼崎市 黒川 紫香
船も見ぬ海はただただ広いだけ

和歌山市 小川佐知子
ふれ合いし心を家にもち帰る

伊丹市 小川静観堂
今年また石楠花の夢室生寺

東大阪市 竹中 肖二
ままことの子がママに似てちやっかり屋

倉敷市 高山みどり
河股 緑水 補若葉源氏は古く新しく

岸和田市 池田 露子
お点前の娘はよそ行きの口を利き

新宮市 大矢 十郎
奥谷 弘朗 足音を殺す娘に気が疲れ

和歌山市 津田 与史
雑草のたくましさを持つある妬心

島根県 堀江 正朗
地球からはみ出しそうな僕を見る

山田 季賛
投句先 千560 豊中市中核塚3丁目13

柳楽 鶴丸
— 15. 橘高薫風苑 — (一人三句)

課題吟を

狙うポイント

正本水客

誰が言い出したのか川柳の引出しなどと冷かし半分の徒名を付けられていた時分には、一つの題にしぼると次から次へと輪転機のように句が湧いてきたものである。誰にでもそんな時期はあるものなのであろう。

さて「課題吟のポイント」といっても別に妙手妙案がある筈はない。一つの課題が与えられると、それを中心にして百八十度、三百六十度と連想の輪を拡げてゆく、四次元、五次元の世界になろうと全く自由、私にとって楽しい空想の世界である。この時点においては苦吟という言葉には縁遠いが、そこからい

い句が生れてくるかどうかは別問題である。しかし句会などで時間的な制約のあるときには悠々と楽しんでる訳にはいかない。応急対策として内容から這入ることを止めて、モチーフというか、句の顔になる言葉の発見につとめる、一つの課題を心の中心に置いて、頭の中のボキャブラリーを展開するもよし、手近かの柳誌をパラパラと繰ってみるのもよい、そのうちに陽電気と陰電気の出会いのよ

うにパチッとスパークする言葉にぶつかれば占めたものである。後は課題とこの言葉を骨組みにして着物を着せてやればいい。この場合の両者は縁もゆかりもない意外性を持っているほど課題吟としての成功率は高いと言える。以下、紙数の許すだけ本社句会で天位に抜けた句を思い出してよめることにする。

花びらの反抗 露をよせつけず

(課題 花、選者 生々庵氏)

花の課題に対する連想の一つに、厚手の大きな花びらの上をコロコロと転げて溜らぬ小雨の情景が浮かんだ、雨が露になり、寄せつけずという推敲までは比較的天やすく出来たこの句を成功させたのは、反抗という異端の語が結びついたことにあるのであろう。

まだ借りがおますと握手して帰る

(未払い、不二也氏)

未払いという固い言葉を噛みくだいて、まだ借りがおますと話し言葉にした発想を買われたと思う。

蹴りあって軍鶏は憎しみ残さない

(蹴る、柳宏子氏)

蹴るとシヤモとは珍しくも何ともないと言うより、一度は誰もが頭に浮かべて、そして捨てて了う連想であるが、私は軍鶏のキョトツとした戦いの後の眼から、憎しみを残さないという主観を得た。

久振り喪服の肩が叩かれず

(叩く、薫風氏)

叩くと喪服の結び付きの意外性である。この場合、上五久振りという川柳的常套語は余

り使いたくないのだが、この場合の喪服の肩を叩き度いという衝動と久振りとは切り離せないと思う。

食う足しにならず善意に背を向ける

(善意、文秋氏)

善意というような題は真正面からぶつかってゆける題である。それだけに平板になりやすい。食う足しにならずと、ズバリ逆手に切り捨てて句になったと思う。

虫 穴を出る日の草の色が生き

(活動、好郎氏)

活動という言葉も真とにも取り組めば、かなり固い響きを持っているので、搦手から私のムードに持ってくるために啓蟄という語が私の琴線にふれた。あとはこれを砕いて句に組み立てればよかった訳である。

郷愁のリズムは土鈴の知らぬこと

(鈴、栞氏)

北川 春 巢 著

句と
随筆 「聴 診 器」

送料共 千円

鈴は土鈴でゆこうと先ず決める。次に郷愁との結び付きが閃いて、土鈴の知らぬことまでは割合スラスラと出来た。だが上五の郷愁が宙ぶらりんである。リズムの三字が生まれてきたのは縮切ギリギリの苦吟の後であった。

ケース バイ ケース

傍島静馬

柳誌、或は新聞紙上などに、発表された作品を見て、川柳って、面白そうだなあ！。こんなものなら、俺にだってできると、誰もが簡単に思っらしいが、さて作って見ようと、ペンを持って、思うようにならぬのが川柳である。自分もその中の一人で、五十才を過ぎてからの遅い入門で、もう二十数年にもなるが、未だにこれといった自信作もなく、依然として低迷状態なのを甚だ遺憾に思っている。

自分は、平生機ある毎に、出来るだけ多く他人の句を鑑賞し、且つ、自身でも出来るだけ多く、作句するように心掛けている。川柳のネタは何処にでもあり、われわれ日常生活の身边にも、ゴマンと転がっており、それをうまく拾いあげるのも、勉強の一つだと思つて気を付けている。偶々、これはと思う良いネタにぶつかつた時には、すぐにその場で、川柳風に一応まとめ、メモするように努めているが、これらの蓄積が、句会で課題吟などを作る場合のポイントとして、大いに役立っているのは明かである。

「こども」という題が出た。一見、作り易そうだが、莫然として範囲が広く、従来川柳に詠い尽された感さもあり、ちつとやそつとの思いつけでは、物にならぬ作りにくい題だ。

「集金へ留守と云おうかと こども」

この句、昭和四十八年一月の作だが、底辺の長屋ぐらしの子供と、集金人にポイントをあてたのが良かったと思う。今日わついと、集金人の大声に、奥で手内職をしている母親の傍で、宿題でもしていた、小学、二、三年ぐらゐの子供が、家庭の窮状を察して、忠義だてをしている情景を描いたもので、日頃の見聞を生かしたものだ。ちよつと作為が臭うようでもあり、表現の内容が古いと思われりかも知れないが、今も昔も、親子の情に変わりはない筈、まあまあが出来と自分では思っている。

一分間の柳論

個性の有る句を作れと言う事を生前の路郎先生から、よく聞かされた私である。個性の有る句を作ると言う事は、一朝一夕には出来得ないことである。作家と選者の努力が必要である事は大切であると思う。作者は句会に於ても選者当て込みの句は作らず、入選を気にせず、自分の個性のある句を作るべきである。句会の席で又誌上で入選句の多い事は嬉しいに違いない、しかしその句が自分らしくない句であれば成功とは云えない。たとえ天

「舌打ちで捨てた馬券に散るサクラ」

本社句会、昭和四十七年三月、兼題「舌」で入選の句だが、厳格に云えば「舌」と「舌打ち」では意味が異なり、どうかと思つていたのだが、幸いにも入選した。これは選者の、題に対する巾広い解釈による、温い配慮の結果であり、うれしく思つたことである。（おそらく、自分が選者となつたとしても、この程度なら、やはり黙認するだらうが）

この句、舌打ちに馬券を持ってきたのがミソで、難を云えば、馬券がやや動くように思うが、実感の句として、春の競馬場風景が、よく出ていると思うのである。この日の句会には、珍らしく好成績で、兼、席、七題の中、十三句入選、殊に「舌」では、外に

「プロポーズ声にもならず 湯く舌」

「もう一本つけさすつもり 舌鼓」

若柳潮花

に抜けても自分の個性のない句は私は残さないうことにしている。平抜き一句でも、潮花らしいと言ふ声を耳にすると嬉しい。自分らしくない句が入選すると、それは選者の好きな句であり、選者の個性で抜いた句であると思ふ。栗君が川柳塔の選に当り作家に対し出来れば職業などを書き添えて欲しいと書いておられた事は嬉しかった。没などは平気で自分の句を作つてゆきたい。

が、平抜きに、都合三句とも選に入り、大いに面目を施したものだ。

昭和五十年四月、本社句会の席題「喧嘩」この題も従来何回となく出されていて、これまで、あらゆる喧嘩、殊に夫婦喧嘩は、嫌やというほど見せられているので、ちよつとむずかしいなと思つたが、以前にこの題で、大ぶん悩まされたのが幸ひしてか、案外、すつとまとめることができた。

もうキッスぐらいで 喧嘩おさまらず

蜜のような、新婚生活も夢のように過ぎ、早くも六カ月、若妻ぶりもやや板につきだした。仲の良い二人を、年甲斐もなく喧嘩をさせてしまい、聊か気の毒に思っているが、この喧嘩、おたがい憎いわけではなく、ホンのちよつとした行違ひから起つたもので、やがて何かの拍子で、もう一度キッスをすれば、二人とも、けろつと忘れてしまうのがオチだ。この句のポイントは、若夫婦の喧嘩に、キッスをあしらつたことにあるが、この狙い、われながら上出来だつたと思つている。

自分には課題吟を狙うに、これという、決つたポイントがあるわけではなく、いわば、ケースバイケースである。老来、頭の体操のためと判らないのである。老来、頭の体操のためにも、閑さえあれば、成るべく多くの句を読み、且つ、作るように心掛けているが、こうした日頃の、勉強と努力の積重ねが、時に応じ句会などで、恰好なポイントを見出す、貴重な糧になつていのではないかと思つるのである。

本社句会三冠王

河井庸佑

本誌47年4月号に、谷垣史好氏が「本社句会の三割打者」というタイトルで書いておられる。

―若本多久志氏が、かつて柳語で本社句会に三割打者が果たしているか、どうかと云われた。という書き出しで46年度のベスト10が発表された。

①不二田一三夫氏(八十三句)②藤岡花梢氏(七十二句)③河内天笑氏(七十句)以下略。そして天位最多入賞は四回の城一舟氏、香川酔々氏、正本水客氏となっている。(三句以内厳守が条件)

この46年度の月間賞杯永久保持は城一舟氏だつたから、天位同点三者の三才を調らべ、一舟氏がトップになれば二冠王になるわけだ。こんなことを書き出すと、賞品制度や天地人制度は作品の墮落と説く人もいるが、それは作者の心の持ち方で決まることである。選者級が賞品をとるとらないも、責任吟社が決めたいことである。また選者の貴禄を示めすため賞品を貰うのがイヤなら句を出さないことである。

入会のお機
十月新学期
(規則書進呈)

会員募集

六カ月修了

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目

(〒五四二) 誓得寺内

関西奇術教室

電話 四七二二八

さて、自分がこれから書きよくするため、このように伏線を張つておいて、さらに47年度の史好さんがものする「本社句会ベストテン」をのぞいてみよう。

①不二田一三夫氏(八十一句)②傍島静馬氏(八十句)③垂井葵水氏(七十九句)以下略。天位入賞者トップは五回の中島生々庵氏、菊沢小松園氏となつていて、月間賞杯永久保持者は十二氏が同点で、その場合の規約には天位の入賞数によって順位が決められるから生々庵氏が二冠王となる。

こうして調べてみると、月間賞杯永久保持者は二冠王になる確率が高いようである。そして三割打者が毎年三名ぐらいいは出ることが分かつた。

では48年度はどうか――。史好氏の文に、「波乱に満ちた四十八年、本社句会ベストテンにも大きな変動がありました。不動の王

座を占有してきた一三夫氏が僅少ながらトップの座を譲ったこと、そして大江俊夫氏(阪上十止庵氏)が毎月コンスタントに入選、二位に躍進したことです。―後略。

①傍島静馬氏(七十五句)②不二田一三夫氏(七十二句)大江俊夫氏(七十二句)以下略。となっていて、月間賞杯永久保持者は二回獲得の有信感から、入院前日に49年度分を調らべ、それをスグ投函するという隠れた美談があったもようである。

さて、49年度は――。(昨年末、史好氏は入院されることになり、編集に支障きたさぬようにとの責任感から、入院前日に49年度分を調らべ、それをスグ投函するという隠れた美談があったもようである。

―またしても静馬、一三夫両氏の一騎打ちとなった四十九年(一月―十二月)本社句会入選トップ争いは、僅か一句の差で前年に引き続き静馬氏が連続首位の座を確保された、という書き出しである。

①傍島静馬氏(七十六句)②不二田一三夫氏(七十五句)以下略。

―またしても静馬、一三夫両氏の一騎打ちとなった四十九年(一月―十二月)本社句会入選トップ争いは、僅か一句の差で前年に引き続き静馬氏が連続首位の座を確保された、という書き出しである。

さきにも書いたように、天位最多の部門と月間賞杯永久保持の部門はベアでいく場合が多いようである。だから入選最多の部門を攻略すれば三冠王は夢ではないとおもう。(この偉業は「川柳雑誌」時代にさかのぼって調べると、一人ぐらい出ていたのではないだろうか)

あまりこういうことをクドクド書くと、ただ入選のみに走るため、他会で入選したものに二度の勤めをさせたり、句数制限を破るなど、結果的には句会低下をまねくことを恐れるのである。

★ 川柳塔社常任理事会 (八月四日)

山積しているので急ピッチ。

二賞発表句会と同人総会の会場は、ご存じ中小企業文化会館ときまる。(九月八日の本社句会以後、当分は同会場となる)本年は本社役員のみ改選に当たるので地方同人諸氏の人でも多いご参加をお願いします。

生々庵、小石ご夫妻の句集が来年三月に発行。これには春葉、栞、好郎、小松園、多久志、水客、薫風諸氏の副理事長以上が選句に当たる。編集部からは一三夫も参加。ハワイ吟行は月ごとに参加者がふえていく盛況さである。(不)

出席 多久志・古方・形水・百酒・静馬・太茂津・生々庵・薫風・一三夫諸氏。

★ 51年版川柳年鑑公募作品について

▼一人一句とします。▼類題は「人生」「社会」「自然」の三題に大別、応募の際は三類のいずれの句であるかを句箋に書き、〒544 大阪生野区勝山南1-14-17 不二田一三夫宛お送りください。締切日は9月20日。

応募句はこちらでまとめ雄山閣編集部へ一括送稿します。

「人生」の選者 佐藤 正敏 柴田 午朗
「社会」の選者 竹田花川洞 堀 豊次
「自然」の選者 大森風来子 橋高 薫風

★ 日川協コーナー

▼常任理事会は7月17日17時大阪市片山事務所、8月21日17時神戸市(会場未定)9月13日13時東京都(会場未定)で開かれまたは予定されている。

▼日本川柳協会通信第3号が発行された。十月十七日に50年度の総会がある。この記事は次号で発表。日本川柳協会は〒530 大阪府北区宗一・大ビル608片山山法律事務所内にある。未加盟柳社への参加を望んでいる。

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一四
夜間 06 四四〇八

幸福の探求

人間陶冶—その展開と実践 (一)

戸田古方

節分のテレビでいろいろの節分を見せても
らいました。街頭で求めるアンケート、「あ
なたの退治したい鬼とは何ですか」に大多数
の人は「物価高」と答えました。折から入学
試験のシーズン、「試験」と答えるのは学生
風の若もの、失業者は「不景気」といいま
す。その中で「渡る世間に鬼はなし」と一人
の年寄りの縁日商人が取り澄して申します。
この悟ったことをいう老人にとっても、「病
氣」は鬼であるらしいのです。東京の池上の
本門寺の日蓮僧は、「福は内」とは叫ぶが、「
鬼は外」とは声にならない声で、内にい
きかせるのだと申しています。貪欲、慎意、
愚痴の三毒煩惱を、赤、青、黒の鬼に仕立
てているお寺もありました。

我が師、麻生路郎先生の遺訓「人間陶冶」
も、この心の中の鬼を払い尽すことをいつ
ていられるのに違いないと思います。口でい
うのはやさしい「人間陶冶」ではあります
が、どういう手順で、お前のものにしてゆけ
と、どういう手順で、よ前のか。不言実行とい
うことは、よほどの達人でないかぎりむづか

いことです。それを口にし、さらに、これ
を限られた短い詩にまとめ上げることで、非
常に長い時間は掛りますが、空念仏に実を入
れていくことができるのです。波型のグラフ
のように、消えかかりながら、向上してゆく
のかもしれない。

大正リリズム、今から五〇年以上も
かしのことですが、「恋愛至上主義」で一世
を風靡した厨川白村氏が「文学の絶対境」と
いう本を書いていられます。絶対境とは純粹
で、特定の目的を持たぬことであります。川
柳は詩、いうまでもなく文学の一つでなけ
ればなりません。川柳もまた何かの目的を持
てはならないのでしょうか。

十九世紀に始まるヨーロッパの近代文化の
芸術思潮の中にロマン主義、自然主義、写実
主義などがありまして、繰返されながら発達
してきました。ロマン主義は理想主義、何が
求める理想なのでしょう。人類が不変の幸福
を求めていると云うことは言い過ぎでしょ
うか。自然主義、写実主義についてもいえ
ます。あらかじめ枠をもうけず、あるがまま
の姿を忠実に追い求めていく間に真実を探求
してゆくのに外なりません。

私の独断かもしれませんが、全ての人類の
営みは幸福の追求であります。それは真
善美の探求。芸術の目標は、いうまでもなく
「美」でありましようけれど、同時に、情
をささえる知と意とが、つかず離れず支え合
うことで始めてものになってゆくのです。約
言すると、幸福とは真実を限りなく探求する

ことに落ち着かざるを得ません。

人類は出現以来、限りなき幸福、不変の真
実を求め、それと一つになれるように努めて
まいったのです。だが、時と処を問わぬ真実
の探求とは。達人にはそれが可能であるのか
も知れませんが、凡俗にははなはだむづかし
いのです。そこに宗教が生れてくるのです。
あるいは天と云い、ミチと云い、カミとい
い、ブツと云い。それらはこの不変の真実に
人類のあたえた名前なのです。

人類の求める幸福は自由という形で、さら
に具体性へとみちびかれてゆくのです。自由
とは何でしょうか。自由とは個人の無限にの
びる幸福に通じるとともに、集団生活を立前
とする人間のルールです。自由と放縦とはき
違えるなど頭からきめてかかればつとり早
くて、簡単ではあるが、いきなりでは万人の
納得は得られませんまい。自由を位置づけるた
め、私は、手離しの勝手気儘から考えていき
たいと思います。それは、自分自身に対し、
また周囲に対して勝手気儘がどんな都合を
呼び起してくるかも、几帳面に、怠ることな
く、チエックしてゆく必要があります。先ず
吟味は自分自身から、自分自身からだし
ても、無制限に振舞うならば、咎めは必ず自
分に還ってきます。「腹八分目に医者いら
ず」という諺がありますね。人間が本来の姿
にもどり、一人でも相手を見つめますと、対
人関係が始まります。どうしても自由に制限を
加え、ブレーキをかけ、コントロールをせま
られます。それでこそ、人は人と人との間に

おさまり、どうやら、人間らしい人間になつていけるのであります。

「退治したい鬼は」と尋ねられて、ほとんどの人々は、立ちどころに「物価高」を鬼たといいました。追いつめられた消極的な欲望の満足を邪魔するものへの挑戦であります。人間陶冶は心の中の鬼を追い払うことだと、私は推測しました。物価高の鬼はたして心の鬼でしょうか。貪欲、慎重、愚痴の三毒の煩惱はたしかに心の中の鬼ともいえませんが、物価高の鬼はただちに心の中の鬼とはいえません。物価高は社会悪とはいえません。だが個々にとってはこれを苦として受け止められても、これをわが心に生じた悪、退治したい鬼と考えるまでには、その間に可なり距離があるようです。物価高のよって来る由来をさぐり尽した末、高度成長に酔いしれている間に、おろかな私の心が、知らぬ間に、物価高の一因を作っていたのだなど自覚するならば、退治したい鬼ともなりうるのです。あります。(拙稿「川柳の出る幕」参照)ここから出発してゆかねば、真の幸福は出てこないものであります。幸福の中味は真実の探求ということになっていくとすでに度々述べてきました。その際、自由の性質の吟味が、さらに具体性を深めましょう。全ての人は自由でなければならず、各人の自由が各人によつて、たがいに犯されてはならないのであつて、各々が、犯されない自由をもつことによつてのみ真の幸福が期待され得るのであります。それこそ、実り多い民主化の前進とい

ことができるのであります。

句と共感について

直原七面山

こと川柳に関する限り何か一言言つてみたのが私の悪い癖。

「水煙抄」の秀句鑑賞欄を読んでいたところ、一寸気になる言葉があつたので一言。

実は担当者の方がその前文の中でこんな意味のことを言つておられました。

それは「……多くの人々の共感を得られない句は川柳ではないと言つていた人がいたが、多くの人々とは一体何人位を指して言うのであろうか、馬鹿馬鹿しいにも程がある」とか、川柳は自分自身のために作るもので、決して人の為にするものではない。などと。これを読んで私は「ああ!!遂に川柳もここまで……」と、誠に淋しい思いが致しました。

もし川柳というものが、この方のおっしゃるように、本当に己れ自身のためにのみ作られるものであれば、その始末もいとも簡単で、出来たその句をご自身の日記の片隅にでも書きとめておけば、万事それでことは足り、何もわざわざ投句とか、発表とかというより、そんな面倒な手続などとする必要はさ

らざらありません。

しかるに何故作家達はその句を世の中に発表し、人の目にさらし、そしてその句の価値を世間に問おうとなさるのでしょうか。考えてみると不思議に思われてなりません。

ご承知のように、句の選を依頼された選者は、はたの見る目も気の毒な程、自分の精根をその選に傾けつくし、自己の川柳生命と名誉とを賭けて、一生懸命に選をされておられます。

一体それは如何なる理由によるものなのでありましょうか。

思うにそれは、「自分の選び出した句が、果して(自分と同じように)万人の共感を得ることが出来るであらうか、どうか。そしてまた川柳界そのものも、この句を立派な川柳句として受け入れ容認してくれるであらうか、どうか」というその一点につきるのではないのでしょうか。

しかも、その句を選び出した選者の心の奥底には、「この句は必ず人のため、世のためになるに違いない」という確信と願いが込められてに違ひありません。

不幸にして私は、この方の経歴も柳歴も、そして川柳上の主義主張も一切存じ上げてはおりません。

がしかし、この方は、「選者」とか「鑑賞者」と立ち場の人々が、当然果さなければならぬ「使命」とか「役割り」というものについて、いささか思い違ひしているのではないのでしょうか。

私のメモ

戦艦長門の最後

吉田水車

水兵の見上げるマスト大将旗

とは言いますものの私は、この方の「その句に作家独自の目が働き、かつ詩心が満ちていると思われるものを秀句として取り上げた」という説(主恵)に対しては、心から賛成の意を表するにやぶさかではございません。が、秀句として挙げられたそれぞれが果して秀句としての諸条件を十分に満たしているのかどうかという点について、そのけじめをどう言った基準で、どのような方法でつけておられるのか、実はその辺のところを少しでもお洩らし願えれば誠にありがたかったです。残念でした。

おしまいに私はこの方にお願いがございました。それは

「欺まされて欺まして振子の企みか」という秀句に取り上げられている句についてでございます。

この句に対決なさいました時あなたは、そこに「人生の何を見、何を感じ、どのようなロマンスを想定され、どんなドラマを発見されたのか、そしてまた、この句のどこにどういう風に詩心が満ち溢れていて、あなたに心をどう捕えどう揺り動かしたのか」そのいささなどについて(機あらば)お教え願えればということでございます。

「言うは易く行うは難し」とか、もし私が「秀句鑑賞」を依頼されたとしても、恐らく私はこの方のように手際よくさばき切ることには出来ないと思っております、そうした自信も全くございません。

皆さんのご健吟をお祈りして止みません。

私のこの句はまことにまずいものであるが、古い話で大阪港に入港していた当時の第一艦隊旗艦「長門」を見学した時の句である。その時「長門」内に設けられた艦隊郵便局で「長門」の絵ハガキに記念に押してもらったスタンプの日付が昭和六年七月五日となっている。たとえ寸時であったにしてもこの足で甲板を踏みしめ、そのクロガネの威容に感泣するほどの年令ではなかったけれども、何となく身ぶるいのようなものを感じたのはたしかのようである。

また別な日に、やはり大阪港で巡洋艦「足柄」を見学した。当時としては装備速力等に於て最新鋭艦で、その艦首あたりの線の優美さはもちろん門外漢の私にでもわかる気がした。

事実当時のわが海軍の造艦技術はまさに芸術品であるとの定評は世界的であった。なお右の「足柄」の艦首辺の甲板にはリノリウムが敷き詰められて、鉄の感触のなかったのも驚異のことにおえたものだった(有事にはとりはらわれたことであろう)

さて話もとの「長門」にもどして、この長門が今次の大戦での最後の模様がテレビの東京12チャンネルで放映されたので存知の方もあるかとおもう。その折私はそのナレーターの説明を「世界の何れかの国へ曳航されてその港に浮んでいくことだろう云々」と聴いたので或は戦利品の扱いで何れかの国の港につながれているものとおもい、上記12チャンネルへ「長門」のつながれている国と港の名が判るものなら知らせてほしい旨照会したところ早速同局から、私の考えの全然誤解であることを指摘するため、わざわざ大略以下のような親切な返事をいただいたのである。即ち

おたずねの件は「長門」が今尚浮んでいるというのはお聞きがちがいです。終戦時唯一隻横須賀に浮んでいた戦艦長門は昭和二十一年七月アメリカの船に曳航されビキニ環礁にもついでかれて原爆実験の標的艦になりました。同時に標的にされたアメリカの軍艦ネバダは奇しくも真珠湾攻撃の際損傷した、この二隻はともに実験に耐え浮んでたそうです。そしてネバダは魚雷で沈められたが「長門」は被爆後なお四日間浮びつづけ五日目の朝姿を消したが沈む「長門」の姿はついに誰も見ることが出来なかった。とアメリカ側の資料にある。

甲 長門

吊鐘と慟哭ひびく深き海底

水車

そのあした旗なきマスト空を切る

同

高らかに君をたたえんうたもなし

同

・水煙抄・

秀句鑑賞

—前月号から—

工藤 甲吉

墓に来てあなたの孫は頼母しい

船越 洋之

とにかく私にはジーンとくる句である。妻に逝かれたあと、今春、中学一年となった孫。私はこの孫の紅顔を飽かず眺めていることが間である。月遅れの盂蘭盆。その孫たちと共に妻の墓前に立つ時、私はこの句を借りる。そして報告する。「おまえの孫は頼母しい」と。無技巧の技巧が光る句。

堀ひけば何かと富士にしてみまい

岸本 豊平次

北海道には利尻富士、私の青森県には津軽富士、また隣の岩手県には南部富士等々。こうなると富士も面白くなかろうというので、この句がその不満を代弁した、ともとれる。川柳というものはなかなか愉快である。

あはずれにどこか女がまだ残り

中 谷 利 美

これも一篇のドラマ。どうふるまっても女は女。第一、男もそうであるが女から女が全く失せるなどという事は生きている限り無いのではなからうか。それにしてもこの女、根っからのあはずれではないと見るがどうか。余情がたのしめる句である。

清掃夫隻腕生きる遅ましき

堀 口 欣 一

清掃夫なるが故に遅ましいのであり、これが普通の職種だったら句にはならなかったにちがいない。作者の温い目を思わされる。

包装紙からおどってる阿波みやげ

榎 村 ふ み よ

阿波踊りはテレビで見ただけであるが、当地の東北三大まつりの一つ「ねぶた」も同様である。包装紙から一がこの句のミソ。

ねころべば女房がまたぐ2DK

安 藤 寿 美 子

2DKの狭さもそうだが、むしろ仕合せな年輩夫婦の姿を巧みにキャッチしている句と言いたい。またいでも、またがれてもなんと思われぬ女房と亭主。これがほんとうの夫婦というものであろう。安菜の一句である。

長生きも夫婦揃ったうえのこと

山 下 勝 一

いかに借老同穴を契ったところで、なかなか

かそうはゆかぬのが世の常。作者はそれを悲しんでいるのだ。変哲は無いが味はある句。

天二物与えずガイド声がよい

大 垣 た も つ

ほめてけなしたところがなんとも憎たらしい句だ。特に下五が皮肉である。だが女はメニコだけではない。ガイドさん悲観無用。

病床にいい知らせだけ持って来る

神 夏 磯 道 子

私の家内は一昨年七月中頃入院、そして昨年一月初め死んだ。その間、私は連日、病床を訪ねた。だからこの句、私には実によくわかるのである。秀句かどうかは二の次。

鉢巻をすれば大きな声が出る

渡 辺 伊 津 志

鉢巻が無くたって出せば出ない声ではないのだが、やはり鉢巻した方が出し易く、事実、また出る。さしあたり絶叫する農民パワ—というところか。鉢巻をうまく生かした。

同じ顔だが金溜めた顔と違い

真 山 国 彦

持てば持った顔になるのである。正直なのだ。だが、それがあまりに度が過ぎるとうすきたなくなるから注意が肝要。この作者、このところをよく突いている。

以上、秀句というよりは私の心を動かした句—といったものをならべた。



消せるものなら 消したい

— 垂鈍の讒言（其二） —

藤村青 一

昭和二十六年二月、川柳雑誌社版、拙著

「詩川柳考」が、私の希望が入れられず高鷲垂鈍著になっていたこと、その出版記念句会には本名に近い詩名藤村青一が表面に出たことで、路郎氏と決定的な亀裂が生じたことは当時の柳界人で知らない人はなかっただろう。ことは詩人の立場を固持した私と川柳人麻生路郎との意志の疎通を欠いた点で、個人的な争いでなく公な論争にまで発展しかねない当時としても大きな問題が内在していたのである。しかし私は路郎氏の御家庭と私の家庭との家族ぐるみの付き合いが絡みあって、泥試合になりかねない気が私の方でありそうに思えたので、涙を吞んで引き下ったのである。

戦前の高鷲垂鈍は「川柳雑誌社」の番犬にたたりして対外的には毒舌をふるい、対内的には雑誌の編集、企画、印刷などの相談やら、お手伝いを自ら買って出たものである。その頃は川柳作句などせず、埋草程度の雑文を氏に乞われるままに執筆した程度で、本名の藤村青一は完全に姿を消して、匿名とか仮名位の高鷲垂鈍であった。昭和十五年三月刊・川柳雑誌社から随想集「詩人復眼」は、明確に本名の藤村青一著になっており、その出版は路郎氏から何ら抵抗も受けず、又その出版記念会では川雑を離れて、私の友人達が発起人になり、北浜の永瀬義郎（版画家）経営のレストラン「グウルマン」で催した事を覚えている。前列正面に著者の私を中心にして、その右横に路郎氏が座り左には実兄雅光、他知人の画家、作家、詩人等二十数名の顔が並んだ記念写真が今もなお懐かしい。路郎氏以外に川柳人の加わっていないのも皮肉だが、氏のお隣でつぶらな瞳を輝かしているリッヂやんが美しく若々しく撮れていたのも微笑ま

しかった。戦後になって兄の会社を任された私が、朝鮮戦争パニックの後の不景気で十八年、整理を余儀なくされ社長の席を降りて以来、私の苦悩の道が続けられたが、その頃の三十年から尾道へ逃避する七、八年間というものは、全国の川柳有力誌に乞われるままに、十枚乃至二十枚程度のエッセイを発表したが、川雑内からとび出た一人歩きした高鷲垂鈍は、必ずしも路郎氏から好感を持たれていなかったようである。二十六年問題の拙著「詩川柳考」は、私の失明を予見して刊行されたものであり、詩生活四十年に互る詩論の終着駅を川柳の場、換言すれば庶民の場に求めた、その経過を記す最後の書と書いていただけに、本名の藤村青一を用い、特にその著書に経済的援助を惜しまなかった知友Oの負担を少しでも軽くしたい焦りから、出版記念にこと寄せ記念句会を催して、広く柳界外の詩人や知人の出席者に買って頂く積りでいたのが、却って大変な赤字になった原因は、今更私の不徳と言うべき他はない。

あれやこれやを考えると、本来路郎氏のために生れた仮名の高鷲垂鈍が戦後、必ずしも路郎氏のためでなかった高鷲垂鈍を私は惜しまたい。四十年七月七日路郎氏の訃に接した時は、高鷲垂鈍の名はその時から永久に消す積りでいた。とは云うものの失明以来自ら作句し、且発表する段階に立ち至って、愚鈍べからうがどうであるが、垂鈍の名は消すどころか二、三の友人の奨めもあり、未だにどうしたものかと迷っているが、尾道から帰阪してみたら昔の柳友と旧交を温めるためになっているが、情ないやら恐ろしいやら、哀歎交々である。

竹莊君を悼む

市場没食子

水谷竹莊君(元同人)が長い療養生活の甲斐もなく、六月二十日逝くなった。昭和十七年六月大阪通信病院に烏ヶ辻川柳会が生れた時以来の親交で、長男の仲人もてくれた。

六年も前に心不全で大阪通信病院に入院したが、ちよつと良くなって退院し、二度の勤めもしたし、電話局の食堂経営もしたが、無理がたたったのか、再入院し二年四ヵ月、正月も療養にこれ専念した。その間幾度か危機を伝えられながら、彼持前の押しと、粘りて頑張り、奇蹟を生むかと思つたが、向つて、私達をほつとさせたこともあつたが、若林草右博士より余後の事を聞かされていただけに、一喜一憂も侘しいものであつた。月に一度は見舞にやつたが、去年八月頃から両鼻孔が栄養ソナデと、酸素吸入で塞つてるとし、あの肥満体が瘦せ細つてゆく姿を見ると痛ましく、顔を見に行くのも辛かつた。

彼の無口は有名で、彼の遺した句集、竹莊居雑叢の序文の中で、路郎先生は「竹莊君は例により例の如く殆んど何も喋らない、大方僕が一人でしゃべっているかたぢだ、ところが竹莊居雑叢の上梓についての相談であるか

ら、いかにだんまりやの竹莊君でも何か喋らなければならぬ筈だが余りしゃべらない(中略)「今書いて呉れはりますか」という。序文のことである。実に短兵急である。と書いていられる。そんな無口な彼が著まめで、しばしば奥さんを泣かせた。いつも私がだしなつていたらしい。

逢いにゆく靴とも知らず妻磨き

は奥さんの腹に据えかねられた句であるらしい。彼は奥行こそ浅かつたが多趣味で、歌舞伎や文楽がかかると必ず見に行つたし、暇のある勤務だつた故で、落語や漫才も、好きで足を向けていた、それにいつの間にか踊りも



習い私にも誘つてくれた。それに感心したのは手品まで習つて、余興の時に鮮かにやつてのけてびっくりさした。

旅行も好きで後年は奥さん同伴が多かつた。行く先、先の川柳家への訪問も忘れず、地方柳人と交際も妙なくなつた。鞍馬先生には古くから知遇を受け、軸だの横額など立派なのをもらい、それがまた彼の自慢の一つで見せてもらった。

彼は大阪北浜生れで、父は書画骨董商と、株式仲買店を業とし竹莊と号した。彼は父の号を継いだ訳である。家運没落後乳母の故郷博多で育ち、その家が料理屋だつたので、彼の板前修業はここから始まつたらしい。竹莊居雑叢のほかに、結婚記念に「共白髪」なる小冊子を出しているが、全国各柳誌の大家から祝吟を受けている。幸せな男である。

もう彼の独特な色気のある句に接することもない、寂しい限りである。行年七十三才

甲句

君も逝くなんとなくなんとなく侘し

遺句

赤電話家でいわれぬこともいえず
逃げ道を作つておいて浮気する
愛情のもつれは金ですまされず
蒟蒻はこんにやくだけの味があり
生きている筈だと伊勢海老叩かれる
板前にこれからという灯がともり
無口でも仕事となれば負けていず
さし上げた傘が追抜く夜櫛

入院して

スマートになつたとやせたととは云わず
妻のふところへ戻るコースと我もなる

避難

和田維久子選

台風の目に入り、艦綱しめなおし
 避難してやっと落ちつき腹が減り
 ハブニングお守り札に助けられ
 大陸に青春埋めた避難民
 避難する時人間の性を見せ
 雷鳴へ農夫は鎌を置いて逃げ
 洪水の避難のがれる土地さがす
 新政府の重荷になった避難民
 ブルドーザーもまた避難の準備する
 われ先に避難訓練とはちがい
 避難命令出せば足れりとする政治
 継ぎ足しの旅館解らぬ避難口
 本番は避難梯子が届かない
 もう逃げ場ないから素手を楯とする
 台風も逃れて避難の荷をほどく
 避難した又その先で焼け出され
 避難先の故里やはり住みづらい
 風の出る予報鉢の木先ず避難
 避難したら少し小指を出して見せ
 避難完了した頃水嵩減りはじめ
 避難先書いた板だけ残ってた
 避難した小学校もきしむ音
 避難した頃は日本負け戦
 くるまれてご先祖さまも避難する

たもつ 晩風 祥月 弘朗 七面山 季贊 魚山 登美也 茶人 秀峰 宵明 梁水 富江 肖二 綾女 千光 野翁 洋々 右近 保夫 敏子 芳子

避難具も有ったにナアと後日談
 避難階段から強盗がはいり
 避難所でやあやあやの人に会い
 難民の中の一人が産気づき
 避難命令出たが津波はやって来ず
 避難民荒れた山河があるばかり
 訓練の時は聞いてた非常口
 避難した車が通る裏通り
 避難訓練スラックスにはきかえる
 矢印を確かめる避難口
 妻と子を一定先に出す避難
 山鳴りへ村は避難の鐘を打ち
 あの人々が近く天国へ避難かも
 訓練の時ほど避難はかどらず
 ふるさとも避難場所には拓けすぎ
 避難したとこへ風向き変えてくる
 騒音から逃げる故郷に山があり

凡九郎 度童 翁彦 俗人 一風 カズエ 不二 素身郎 本蔵 木蔭 福水 武雄 悠泉 可住 軒太 里風 道夫 無人 松花 重人 一郎 道夫 無人 松花 重人 一郎

捨て猫

川口弘生選

捨てる気で猫つれ出して持ち帰り
 拾ろて来た猫の産んだ子捨てに行き
 猫捨てに行先のない切符買う
 耳打ちをして捨て猫の場をきめる
 女房をクッションにして猫をすて
 車から田んぼへ猫を投げて逃げ
 猫捨てて片手拌みに去る老婆
 捨て猫へ飼われるまでの餌を添える
 捨て猫へ可愛がってと札をつけ
 捨てて来た猫を迎えに行く風雨
 捨て猫を庇う娘と妻がもめ

晩風 満津子 芳仙 魁光 漫柳 一郎 右近 露子 道子 香珠 月思

残暑お見舞い

申しあげます

丸文川柳会

- 会 員 竹内 翁 童
- 会 員 吉野 頑 念
- 会 員 丸岡 玉 仙
- 名 員 藤井 春 日

捨て猫の人懐つこさが拾われる
捨て猫を抱えて子供まだ迷い
猫拾う子の純情を叱るまじ
捨て猫の拾うて欲しい声で鳴き
捨て猫の声お隣りへ行ったらし
飼主の家へ捨て猫もどつて来
善人と見たか捨て猫付きまとう
捨て猫につきまるとわれる夜の道
猫好きをもう捨て猫にみぬかれる
味しめた捨て猫ジャンプして逃げる
不信の眼向けて捨て猫さつと逃げ
捨て猫が闇のドラマをみてしま
捨て猫が通り盗られた顔が追
捨て猫と捨て猫不運をかこち合
捨て猫に馴れても腹は空くのなり
鳴く事も忘れ捨て猫生き続け
捨てられた子猫悪い事しないのに
捨て猫の目人のエゴを見据えてる
捨て猫に聞けば言訳ありそう
捨てられた猫よ人災と怒れ
捨て猫のせりふ人間奴薄情
お前はね元はと云えば捨て猫よ
傷心の今日捨て猫に会いにけり
捨て猫にも似る或る日僕の影

人 七面山 千翁 福水 与史 千翁 七面山 洛醉 昭治 武雄 暁明 敏 代仕男 みどり 重人 凡九郎 可住 綾女 弘朗 芳子 肖二

臆病な捨て猫へずみにもおびえ
捨て猫の柔しい夢に鈴の音
捨て猫の斗志が今日も爪を研ぎ
捨て猫のオスメス見分けるのも女
天 軸

年寄りに孫おしつけて共稼ぎ
若い気が抜けぬ年寄りにも困り
年寄りと見られたくない若作り
年寄りの愚痴を素直に聞いてあげ
温かい言葉へ年寄り涙ぐむ
年寄りの生きがいが川柳と共にあり
錆びついた過去なつかしむ共白髪
年寄りにならずペタルを踏む勤め
年寄りの意見も参考として聞かれ
結局は子に従って老いの坂
老い目も達者年寄り臭くなし
耳残のフナイト夜警の職なし
途中下車長寿の村で聞く秘訣
会長の椅子に年寄り封じ込め
医療無料年寄りが多過ぎる
年寄りが居てくれたらと思う日も
明朗な老いは年輪おき忘れ
年寄りの小言へ若さはね返り

素身郎 本蔭棒 梁水 三男 洋々 肖二 道泉 竹馬 梁水 祥月 可住 登美也 国彦 軒太楼 里風 バット 季贊 本蔭棒 白水 豊生

年 寄 り

藤井明朗選

若い氣でいても足腰ままならず
古いへ尚ニューファッションに胸弾む
口だけは年寄ってなお負けはせず
どの花を見てまぶしく老いている
思い出を暖めあって老夫婦
年寄りの夢はだんだん細くなり
年寄りの杖いきいきと年金日
年寄りの狭知甘えることに慣れ
年寄りが年寄りいたわる老人会
年寄りの愚痴も湯呑みのしみとなり
年寄りのどたん場に來てやや卑屈
年寄りのキャリア上手に聞き出され
年寄りの紅は妖氣を漂わせ
留守番の年寄り幼児とおままと
年寄りを抱いで丸くおさえられ
年寄りの財布もゆるむ孫と居て
留守番をして年寄りに役があり

佳 春日 芳子 カズエ 一風 秀峰 千翁 七面山 茶人 千翁 隆子 松花 伶明 芳仙 綾女 与史 弘朗 武雄 露持 晁風

初歩教室

題「夢」

本田恵二朗

ケーテ・コルヴィッツというドイツの優れた女流画家がいた。ナチの弾圧下に、芸術院会員も返上して、自画像と母と子と死とをテーマに繰返し描き続け、一九四五年七十八才で生涯をおわった。そのケーテの言葉に次の意味がある。『私の芸術が目的を持っていることに満足していません。私は私たちの時代に働きたいのです』私はこの主張に打たれて、しばし瞑想にふけた。そして幾度もなめまわすように味ったことである。

前向き姿勢とは、目的を持つことと、働きかけることである。川柳人もかくありたいものだ。いやかくあらねばならぬと思う。一つまた夢が終った流れ星 露杖

(流れ星のようにはかなく消えた夢) 同人に推せんされてお芽出度う。これを機に当教室を抜け出して、川柳街道を堂々として歩かれることを祈る。

どんな夢見てか 静泉
(なんの夢見たのかニッコリ子の寝顔)

夢があるから四十路もまた愉し
(よそ路ゆくわれに夢あり青い空)

同 岳麓

夢の世と自己解釈と裏を行き
(この世は夢の世だ裏街道をゆく)

同日子

同窓会夢が叶ったらしい顔
(老いし犬しきりと寝言いつている)

同 落猿

賭けた夢似たりよったり五十肩
(夢を追う若者都会の垣塙に喘ぐ)

同 佐知子

旅の夢広がる史蹟地図の上
(旅の夢地図の史蹟を今日も追う)

同 同

夢をもち青年の顔失わず
(夢を持つ男若さを失わず)

同 同

インフレに夢と終ったマイホーム
(マイホームの夢インフレに掻き消され)

同 サヨ

草花に夢をたくして余生満ち
(夢で逢う亡夫はいつも若々かし)

同 同

口下手の今日も熱弁ふるう夢
(口下手が夢で熱弁ふるうてみ)

同 同

葉代ものかは夢よもう一度
(南無三宝惜しいところで夢がさめ)

同 同

恍惚の不安が夢になって追い
(恍惚の不安夢路の灯が暗い)

同 同

夢かなう男の意地のある所
(夢叶う男の意地の見せどころ)

同 同

母病気夢見て里へ便り書き
(母の病む夢気にかかる便り書く)

同 同

腹の子に夢を託して語る宵
(胎の児に託す夢あり遠花火)

同 同

彩りのある夢をみた日の喫茶
(七色の夢を見た日のお茶の味)

同 同

夢心地きっちり手前で覚めて起つ
(夢心地の岸で理性が甦り)

同 同

夢多き青春現実を恐れぬ
(夢一つずつ消して物価高)

同 同

恍惚の夢が枯野に迷い込め
(夢を持って持てと若者おだてられ)

同 同

夢でよし億の脱税してみたい
(初夢の幸なく秋の風が吹く)

同 同

夢さめてこしかた憶う送り梅雨
(おさげ髪で蛭狩りした遠い夢)

同 同

夢に見る人あり内蒙張家口
(医者と教授どちが夢)

同 同

吉夢も凶夢も遠く鞞揮る
(同床異夢茶柱に溶けてゐる)

同 同

宗教を押し売りにした夢判断
(夢判断などと宗教売りつける)

同 同

親の夢子の夢用す笹青く
(夢さめて女一人の闇の中)

同 同

夢さめて女孤独の闇にいる
(夢さめて女一人の闇の中)

同 同

子が継がぬ夢をまだ見ぬ孫にかけ
(生甲斐はまだまだ消えぬ古稀の夢)

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

初恋の心に残る夢枕
(初恋の人と出会うた夢の園)
夢もない老いの坂道淋しくて
(色褪せた夢の坂道とほとぼと)

夢見つけた生きよう命つきるまで
(小さな夢見つけて余生の歩が軽い)

虹の夢抱いた昔もありました
(七色に夢がもえてた頃もあり)

スタートはきれいな夢を持ってたに
(スタートはきれいな夢を持ってたに)

山の彩地の彩故郷の夢を見る
(山の彩地の彩故郷の夢は佳し)

夢がある青春はたのしいな
(青春は楽しでっかい夢がある)

青春は楽し夢がある夢がある
(青春は楽し夢がある夢がある)

幸運な女が夢の玉の輿
(玉の輿併せすぎて夢心地)

東洋樹川柳賞受賞記念

第27回西日本川柳大会

とき 昭和50年9月14日午前8時開場

ところ 久米南町中央公民館大ホール

兼題 時・登る・葉・ペン・いのち・小径
選者 三条東洋樹・柴田午朗・大森風来子
・西沢青二・橋高薫風・山田止水

席題 当日3題発表・締切11時30分
各題2句、タテ22センチ、ヨコ4セ
ンチの句箋に1句ずつ明記、裏面に

雅号を書き8月30日までに弓削川柳
社宛(出席者は当日午前11時まで受

付)。

秀村

つね

同

同

ますえ

同

三十四

文子

青年の夢は砂漠に砕け散り
(青雲の夢が砂漠に来て砕け)
もえ尽きて夢もはかないこぼれ花
(もえ尽きてはかない夢のこぼれ花)

夢はばむ壁へ新たな闘志湧く
(夢はばむ壁へ根性が目を覚し)

まだ夢は失いたくない五十坂
(五十坂まだまだ夢は捨てないぞ)

小遣いを貯めて小さな夢を買い
(D51の魅力も遠い夢となり)

D51の勇姿はるかな夢と消え
(D51の勇姿はるかな夢と消え)

交らぬ愛へ女は夢を賭け
(涙あり笑み明日の涙で夢を織る)

果せねば三途の川に夢の橋
灯台へ故郷の夢が円く舞う
レールまだ敷かず夢中になれぬ性

会費 出席五百円(発表誌、記念品呈) 投
句三百円(発表誌呈)

表彰 岡山県知事賞ほか9賞を総合成績で
(出席者優先)

主催 弓削川柳社
後援 岡山県・同教委・久米南町ほか

第四回北陸小松川柳大会

日時 昭和50年9月28日午前10時から

場所 小松市小馬出町小松市公会堂(国鉄
小松駅より徒歩15分、市役所隣り)

席題 各題共選
「先生」 大阪 亀山 恭太選
「異端」 石川 森下 冬青選

夢を追う賭事すきなのも男
うっすらとばかりして話題に夢もたせ
抽せん日までの夢売る宝くじ
筋道の通らぬ夢を整理する
夢の中でも横顔見つめてた
少年の夢を知ってる野球帽
夢をみる少年空に地図を描く
後編も見たいと思う夢が覚め
明日の夢今日の苦難を乗り越える
一夜の夢ほんとして欲しい夢
青春の夢は未完のままで消え
リバイバルさせてあの日の夢を追う
寝ころんで自作自演の夢に酔う

洋子
紀美代
重人
同
篤史
同
道子
同

頼次
伊津志
凡九郎
同

正則
茂彦
慶彦
無彦
道夫
同
カズエ
同
静子
同
大成

題一洗—九月二十日締切(十一月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一—一九一三四
本田恵二朗

「旗」 新潟 藤井比呂夢選
「迷う」 大阪 中田たつお選
「別れ」 大阪 橋高 薫風選
「生涯」 本社 伊藤 茶仏選

出句 席・宿題とも各二句提出
締切 11時30分、席願12時
表彰 市民賞ほか多数
会費 五百円

投句 当日不参加者の投句はご遠慮下さい
連絡先 小松市本町一丁目一〇 吉田秀哉宛
主催 市教育委員会、石川県川柳作家協会
後援 北国新聞社

北国新聞社

大萬川柳

「比べる」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 四百六十八句
入選 七 十句

伴せの度合い比べるクラス会

今治 有里

お隣りを引き合いにしてまた拗ねる

今治 宵明

柄ほめて内心自分と見比べる

堺 千万子

伸びる孫と縮む私の背くらべ

笠岡 古庵

見栄はらぬ暮しに比べる人がない

大阪 好一

比べても詮ないものを嫁姑

藤井寺 吸江

せめてもの救い比べる車椅子

富田林 花梢

顔は負け心はうちの人が勝ち

大阪 一舟

左手に比べ右手のいい手相

鳥取 日満

盛り具合くらべてまわる市場籠

宝塚 静馬

女もうさげくらべしている腫

大阪 凡九郎

よその子がうちより早く歩き出し

背比べして子の成長をたしかめる

松原 重人

比べものにならないくせに背伸びする

松江 晃男

良縁と恋計りにかけて嫁おくれ

東子 悠泉

見比べて妬心も優越感にする

神戸 静泉

愚弟賢兄嫌な言葉として育ち

堺 ひろ子

比べても所詮クローラーないわが家

豊屋川 小路

女つれ比べられてる眼を感じ

大洲 曉明

納税ベストテンに比べるあほらし

神戸 どんたく

実物と見合写真の違いすぎ

大田 軒太楼

見比べて安い方をまだ値切り

大阪 三十四

あれこれと撰って比べて買わず去

松原 サヨ

伴せを比べて心の灯をともし

八尾 美幸

事毎に隣りの嫁と比較され

岸和田 逢春

ぜいたくな隣りと比べるから疲れ

鳥取 洋々

ライバルとして事ごとく比較され

大阪 柳宏子

比べられる方は意識もして居らず

産湯から墓まで人間くらべられ

墮ち果てて比べるものない強み

比べるつもりではないが好き嫌い

堺 天笑

捨て切れぬ没句くらべている未練

和歌山 久子

丈比べ柱に残して征ったまま

貫われる小犬も器量くらべられ

和歌山 富江

比ぶれば本物貫禄ある光り

比べまい生れも育ちも違う人

和歌山 幸子

見比べる相手で決まる幸不幸

一から十まで比べてみたい団地妻

どんぐりのその背くらべにいる私

比べるのは止そう淋しさ増すばかり

富田林 美代

比べる目より持たず教育ママの鞭

頂点で比べる者のない驕り

大阪 君子

比べる子もなくて夫婦よく稼ぎ

比べてもやはり良妻

和歌山 としよ

比べると俺はピエロになるばかり

自叙伝を読んで比べるものがない

見比べて偽筆の方を買っている

近所の目に先妻と比べられ

人生の縮図比べるマイホーム

エリートと天秤にして気が疲れ

古い託す嫁よそさまと比較せず

パパとママどっちが好きやと無理

を聞き

できのよい隣りのパパと比較され

満ち足りているのに先夫とつい比

べ

阿万万的著

句と文と絵のミニ句集

「川柳散歩・大和路」

送料共 一五〇円

永宗 宗義 著

「高瀬舟」 送料共三百円

看護婦の美醜比べるほどに癒え

都合のいいデータだけを比較する

ひがむまい下には下がある生活

みそ汁もひと味ちがう妻と嫁

尼崎 利美

心ない人が比べる寄付の額
旗色を見くらべている自己嫌悪
嘘のない方の言葉は胸を打ち
比較にはならない亀が先に着き

勸教 梁水

実力で学歴の差に負けていず
本物に比べ賈物光りすぎ
見比べて手を出す欲が兎に芽ばえ
根比べ黙秘の口が割れてくる

佳句 神戸牧人

見比べる知恵を恋は忘れさせ

里芋の親とわが身を見比べる
和歌山 武雄

比べものにならず指環の手をかく
し
トビがタカ生んだとうれしい比べ
よう
どんぐりの背比べだからウマがあ
い

人ノ句 大阪 文秋

朝顔の花まで隣りと比べて見
地ノ句 大阪 繁子

比べられ比べて女に夢がある
天ノ句 八尾 美幸

比較してこの倅せを大事がり
富田林 花梢

選者 吟

ゴーマイウエイ比べる余裕などは
なく
昭和五十年
度

ベストテン (七月現在)

一	美幸	一六、五八尾	一四	利美	一一、〇	具塚
二	花梢	一五、〇富田林	一三	緑水	一一、〇	藤井寺
三	可住	一四、〇兵庫	一二	翁童	一一、〇	倉敷
四	好一	一四、〇大阪	一一	柳宏子	一一、〇	尼崎
五	多志	一二、五西宮	一〇	柳志	一〇、五	山崎
六	小久	一二、五寝屋川	〇九	あいき	一〇、〇	大阪
七	牧人	一一、〇神戸	〇八	洋々	九、〇	鳥取
八	弥生	一一、五八尾	〇七	宵明	九、〇	今治
九			〇六	文秋	九、〇	大阪

夢のハワイ観光 日米交歓川柳大会

日時 昭和51年1月21日(水)から、
1月26日(月)ー5泊6日。
場所 ハワイ
場所 十八万四千円
旅行費 近畿日本ツーリスト
旅行社
主催 ハワイイロー社・川柳塔社・
団長 若本多志。会計 板尾
岳人。会計監査 西尾菜。地域
委員 西田柳宏子、野村太茂津
月例会において一万円宛積立、
(昭和52年3月まで)
申込方法 第一回申込金三万円。あと毎
月例会において一万円宛積立、
申込締切 昭和50年9月末日。5月以降
申込の方は来年一月例会までに
十万円になるように積立。

参加資格 本社関係の人の推薦で誰方でも参加できます。
参加申込者ー若本多志・西尾菜・菊
沢小松園・橋高薫風・島居百酒・野村太
茂津・若宮武雄・板尾岳人・藤岡花梢・
岩田美代・和田維久子・天正千梢・垂井
千寿子・内芝としよ・宮西弥生・太茂津
夫人・小松園夫人・薫風夫人・金谷和子
・伊藤ご夫妻・櫻谷漫柳・八木摩太郎・
児島亨呂志・玉置重人・塩満敏・大路美
幸・葉夫人・三井醉夢・藤村メ女・黒田
真砂・大坂形水・伊藤暢・有本ふみえ・
高橋千万子・伏見茂美諸氏
参加者にはパンフレットを差し上げ、
詳細ご通知しました。なおご不審の点は
幹事までお問合わせください。

昭和五十年第十回
「ほとり」 五句以内
締切 九月二十五日

第十一回
「靴ペラ」 五句以内
締切 十月二十五日

投句先
〒593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七
藤井二三方
大萬川柳係

柳界展望

(原稿締切毎月末)

草丘
都生・孤呂二・代仕男

通規・雷音坊・明朗
町紅・鶴丸・好郎
独仙・軒太楼・縁之助

(左から)



鳥根文芸大会から
▼川柳塔社50年度二賞発表
句会と同人総会が10月5日
午後二時から大阪府中小企

業文化会館5階五一号室で
開催。(天王寺区上汐町五
丁目二番地・地下鉄谷町
九丁目下車南三百米・電話
771-4096) 9月8
日の本社句会以後は前記会
場を使用することになった
▼生々庵主幹の喜寿、小石
夫人の古稀を記念して来春
三月に句集刊行が本きまり
となる。

▼ふあうすと川柳社の「第
20回全国川柳作家年鑑」は
二〇八六名の参加があり、
その底力を遺憾なく発揮さ
れた。

▼第24回東北川柳大会が10
月5日午前10時から宮城県
労働福祉会館六階大ホール
で開催。題は「生れつき・
種子・赤・戸籍・かこむ・
沈む・カッパル・エネルギ
ー・心機一転(二句) 投句
料三百円・発表誌希望には
別に二百円。〒980仙台
市東八番丁一七〇後藤方東
北川柳大会事務局あて。

▼第2回新潟川柳祭は9月
21日10時から新潟市中央公
民館で開催。題「覗く・再
会・釘・盛り場・すれすれ
・一喜一憂・二(2句) 投
句料三百円(発表誌呈)
句締切9月11日 〒950新
潟市鳥屋野二五一中野悠歩

宛。

▼柳友会復活二周年記念句
会は9月15日午後一時から
東京・四谷西念寺で開催。
題「月・屋根・壺・花形・
階段(3句) 投句締切9月
5日郵券二五〇円発表誌呈
〒114-4 東京都北区中志
一〇一八―三〇七号本間
正五郎方。

▼高鷲亜鈍氏(寝屋川市)
の令兄、詩人の故藤村雅光
氏の詩作品が日本現代詩大
系第十巻に収録された。東
京都千代田区神田小川町、
河出書房新社B版三八一頁
定価二三〇〇円。

▼森田若人氏(鳥取県参
事)が指導した川柳塔社同
人は数多く活躍中だが、近
く新しい川柳会を創設され
るとのことである。氏は市
の文化団体協議会副会長や
鳥取文芸懇話会理事のほか
日本海新聞、読売新聞など
の柳壇の選者であり、町内
会長に交通安全協会副支部
長という大変なバイタリテ
ィーの持ち主である。

▼上方芸能七月号(41号)
に生々庵主幹の「嘘は云え
ず、さりとて化石にもなれ
ず」と、東野大八氏の「路
郎物語」から「上爛屋ヘイ
ヘイヘイと逆らはすー当

百」などが紹介されてい
る。不二田一三夫氏は同誌
へ毎号「川柳寄席」を寄稿。
(B5一六八頁・定価五百
円・送料一六〇円・発行所
大阪府西区京町堀二丁目
五七(あゆみ印刷工芸社内
〒五五〇)
▼柳樽寺川柳会川柳人編集

所変更―〒107 東京都港
区赤坂七―六―三・三室天
翠方(電五八四・四七八
七)
▼備北新聞に川柳塔が紹介
されている。川村好郎選の
「晴れ間」優秀句ほか。
▼隠岐高校60周年記念学園
祭第3回川柳展示会が9月

26日から4日間同校で開催されるが、柳誌や色紙など川柳関係資料を貸してほしいとのこと(〒685島根県隠岐高校川柳部田中登志宛)

▼若本具里院氏(五条市)から「柳界で私の最も敬愛する高瀬老人、野迷路大人の御他界のこと承り驚いています」

▽同人の動向△

▼若本多久志氏(西宮市)は7月12日の篠山句会の柳話をしてから夫人と籠の坊温泉に一泊され夜の暗れ間に源氏蛭を観賞された。

▼阿万方の氏(泉佐野市)は句集「川柳散歩・大和路」を30冊、本社へ寄贈され、一冊百円でお頒けされることになった(送料60円)

▼菊沢小松園氏(大阪市)は相次いで同人が消えていくので、新同人推薦を考えています。一悼・章雅

「西成の風にこれから距離が出来一悼・英断」観世音詣りつづきはあの世界からする一悼・野迷路「天二物を与え静かな幕になり」

▼吉岡通児氏(松江市)路郎忌出席は本年で五年連続です。また来年もと楽しみにしていますと。

▼山内静水氏(竹原市)英断さんの追悼句会は六十名近い人が西から東から集って盛会でした。

▼若柳潮花氏(高槻市)は総持寺団地のむつみ川柳会の指導を頼みにこられ迷っているとのこと。

▼久米奈良子さん(東大阪市・紫舟)は第27回毎日書道展に入賞。8月20日、26日まで京都市美術館で作品が飾られた。

▼山田季賛氏(高槻市)元気がやっています。そのうち句会にも出席しますと

▼垂井千寿子さん(和歌山市)が令兄の高橋与土男氏と同伴。編集部の一三夫氏へ故葵水社遺句集の相談に7月29日来社。11月初旬に発刊の予定である。

▼藤田軒太楼氏(大田市)は八月四日来社。

▼吉永川柳社うどん祭の寄せ書拝受。

▼天正千梢さん(大阪市)から「三回目の御嶽さんへ参拝して来ました。「がたがたふるえ三千米の御来迎一千梢」

▼板尾岳人氏(富田林市)から「新穂高平尾温泉と北アルプス笠ヶ岳山荘の二通「ストープを囲みあしたの道考える一岳人」

▼羽原静歩氏(守口市)から「幼稚園の先生方と帝釈峽へ来ています。「帝釈峽の河原は冷々と一静歩」

▽9月の句会△

▼南海川柳会「18日六時から一題一出張・流れ・後指。会場一南海電鉄本社食堂内。」

▼南大阪川柳会「20日六時から一題一夕・脱皮・慣い・シツク。会場一松崎町三丁目大萬。」

▼川柳東大阪「27日六時から一題一敬老・夢中・拗ねる。ゴキブリ。会場一東大阪市中央公民館第二集會室」

▽旅情△

▼天正千梢さん(大阪市)から「三回目の御嶽さんへ参拝して来ました。「がたがたふるえ三千米の御来迎一千梢」

▼板尾岳人氏(富田林市)から「新穂高平尾温泉と北アルプス笠ヶ岳山荘の二通「ストープを囲みあしたの道考える一岳人」

▼羽原静歩氏(守口市)から「幼稚園の先生方と帝釈峽へ来ています。「帝釈峽の河原は冷々と一静歩」

▽9月の句会△

▼南海川柳会「18日六時から一題一出張・流れ・後指。会場一南海電鉄本社食堂内。」

▼南大阪川柳会「20日六時から一題一夕・脱皮・慣い・シツク。会場一松崎町三丁目大萬。」

▼川柳東大阪「27日六時から一題一敬老・夢中・拗ねる。ゴキブリ。会場一東大阪市中央公民館第二集會室」

昭和五十年文化祭川柳大会並
第十回川柳文化賞贈呈式

日 時 十一月三日(文化の日)午前十一時
所 中央区新富一ノ六ノ八印刷會館
地下鉄 日比谷線八丁堀駅福祉會館寄り
下車、築地に向い徒歩五分右入り

宿 題 第一部(出席者) 第二部(投句者)

「栄える藤島 茶六選」「逆 さ 荻野 義博選」

「再 会 大阪 中島生々庵選」「さらさらさら」武藤かめ吉選

「旅 野村 圭佑選」「賛 成 白井 花戦選」

「さぐれ 深山二呂三選」「誘 う 高峯茶の丸選」

「叫ぶ 鹿島一甫選」「先 走 る 野本 昭四選」

「才 能 志水 劍入選」「残 境 鈴木 久春選」

「サラダ 山崎 涼史選」「残 業 関根三 巴瑠選」

「盃 神田仙之助選」「指 す 佐藤 正敏選」

席 題 四題(宿席共各三句吐)

特別課題 一題 小谷 源氏選

締 切 宿席特別課題共 一時半

會 費 金千円也(出席者)記念品・粗飯呈

投 句 第二部のみ投句料金五百円也(第一部投句料半)

投句締切 十月二十日消印有効、各題毎に別紙のこと

賞 一部宿席合点三十位まで。二部合点三十位まで呈賞

発表誌 一部、二部同時発表(年内発行予定)

投句先及事務局 東京都文京区千石三ノ三五ノ三

〒112 日倉 寿 夫 方
TEL 九四六一四七八六

主 催 川 柳 人 協 会

本社八月句会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

東北方面の豪雨禍などで関西もゲンと涼しく、きのうまでの暑さとはウソのよう。会場側の都合で今月は会場がややせまく、不行届きの点、おわび申しあげます。

名手定金冬二氏のご出席をはじめ、番傘の高木幸太郎氏、または太茂津氏の和歌山勢、久しぶりの欄蘭氏、初出席の朝山千世子さんなど、皆さんで川柳塔の句会を盛り立ててくださることは感謝にたえない。

西尾菜氏の柳話は、去る日の大陸川柳人同窓会の思い出をつづられたものである。

越智伽藍さんを最近の若い人は「おち」と読めないそうである。越智氏がある病院で、看護婦さんから「エッチ」さんと呼ばれたそう、なるほど「エツ・チ」とも読める。

このほか氏の別行動の話がつづくが、これは次号で読み物として本誌へ発表させていただくことにする。

正本水客氏の代選で若本多久志氏がピンチヒッターとして立たれた。句風の違う代選でアテの外れた方もあったとおもう。月間賞杯

は宮西弥生さんが獲得。

(進行) 西田柳宏子 | 記録・高杉鬼遊

出席 | 与呂志・柳志・与史・太茂津・武雄・文秋・摩天郎・多久志・南柳・柳信・肖二・綾女・古方・葛城・葉・凡九郎・緑水・鬼遊・右近・喜風・弘生・柳宏子・幸太郎・蘭・生々庵・漫柳・静馬・一三夫・一舟・滋雀・一三・敏・誓二・薰風・百酒・美幸・頂留子・牧人・千世子・瓢太・維久子・重人・花梢・いわを・儀一・岳人・あいき・君子・智子・度・冬二・夕花・鎮彦・吸江・十止庵・小松園・雀踊子・好一・川狂子・メ女・鶴声・酔々・弥生・正彰・庸佑・葉子。

席題「汗」 竹中 肖二選

稼いでる汗は流れるままとする いわを
汗拭いてくれる幸せ妻がいる 十止庵
汗引いた頃クーラーが利いてくる 小松園
やしさを汗を拭き拭き耐えている 吸江
塩辛い汗も楽しい育ち 維久子
溶鉱炉守る職工汗光る 綾女
許されてから本当の汗が出る 冬二
言い訳のしどろもどろに汗が湧き 綾女
甲子園素振りの汗が今日みえる 維久子
青春の汗滴となる 甲子園メ女
一点差守る 九回裏の汗 多久志
汗を大写してクライマックスらしく 古方
ほっとして危機切り抜けた油汗 滋雀
インタービュ横で次官が汗を拭き 柳志
働いた汗と別れるしまい風呂 柳宏子
汗ポタリポタリ太陽と語ろうか 凡九郎

席題「恋」 板尾 岳人選

札束の恋モヤシに似てしおれ 鶴声
恋などは知りません食い盛り 鶴声
結局は押しの手で恋ない 庸佑
ピツクの恋はザイルで結ばない 太茂津
山好きな娘にやはり山男 儀一
信じてる恋はおみくじなどひかぬ 雀踊子
ソロバンではじまりソロバンで終る恋 静馬
恋の灯が暗い処を撰って行く 柳宏子
ナツメロが昔の恋を売りあるく 智子
倅せな恋ばかり来ず喫茶店 柳志
他人から見れば蓼食う虫の恋 維久子
結婚をしてから恋をすなおす気 凡九郎
恋無縁せめて花など愉しまん 鬼遊
初恋の人からきっちりくる賀状 花梢
聖書よし恋のとりにちしてくる 栗
町内の恋は噂にリードされ 柳志

掃除婦の汗子にかけるとある夢がある
汗くさい夫のある日たのもしく
気の弱さ補う汗をかき汗をかき
灼熱の湯をはねかえす玉の汗
ぜい度な陽を拭いてるゴルフ場
階段の汗頂上の寺でふき
山男の汗頂上に来て拭う
秀才がある日バイトの汗をふく
炎天の汗が実った稲の出来
生きがいは汗でかせいだ金で飲む
真実の汗を継ぐ気の歎で知り
汗くさいシャツに息子が匂うなり
遅刻した言い訳汗を拭きながら
肖二

老らくの恋淡々と茶を入れる 柳宏子
 恋多き女で過去をふりむかず 夕花
 中年に計算をする恋もあり 鬼遊
 二回目の恋は大人の恋だった 緑水
 うちあげた恋大らかに腕を組み 重人
 恋をする顔には齡が消えている 十止庵
 恋をすする顔には齡が消えている 吸江
 恋をする扇子を別に持つてゐる 武雄
 編幅傘を貸してあげると恋になる 冬二
 使うだけ使わせ恋は横を向き 緑水
 母さんにとけぬ私の恋である 花梢
 雑音で消されてならぬ恋の詩 生々庵
 失恋をして風鈴を買ってくる 酔々
 送別会握手してから忘れず 柳信
 秀才に初恋の話きかされる 栞
 初恋はペンの先から燃え初め 与史
 石橋を叩いて男の恋は負け 生々庵
 能面の裏ではげしい恋をする 夕花
 天使から朝の散歩で恋貫う 酔々
 ふるさとの恋はポプラと十字架と 美幸
 恋一つ拾いそこねて旅終る 弘生
 逢うまでは初恋きれいな人でいる 一三夫
 恋をする人妻の目が濁っている 十止庵
 失恋の苦がさコーヒーかき廻し 滋雀
 恋を知り無口になってゆく少女 君子
 両親が恋愛なので見合する 漫柳

本社会の会場が九月から
 中小企業文化会館へ移りま
 す。

狐の檻に狐がおって恋かしら 冬二
 父のない子らが育てた母の恋 一三夫
 さい涯ての町を発つ日の送り傘 美幸
 坂の上に恋があるので坂登る 冬二
 峰歩き乍ら小さな恋をする 岳人

兼題「車窓」

児島与呂志運

車窓から手を振っただけの別れ 季 贊
 ハンドルを慰やす車窓のマスケット 軒太楼
 指話でない指話して新幹線発車 踏草
 車窓から貧しき家の裏を見る 登美也
 バイバイと書いて新幹線の車窓 忠三
 発車までパントマイムの内と外 どんたく
 窓側の座席に優越感がある 日満
 花嫁の母が車窓へ押出され 曲ん手
 眼をやれば蠅が車窓にとまってる 亜純
 動き出した車窓まだ手を振っている 幸太郎
 車窓まで断ち切れそうにない慕情 冬二
 別れきて車窓はげしき雨となる 夕花
 古里すてる車窓へ涙の通り雨 好一
 護送車視界を遮断するカーテン 鶴声
 蒸発の夜の車窓にある不安 儀一
 出迎えの車窓まっさきに妻の顔 生々庵
 別々に坐って車窓で合う視線 弥生
 ふるさとへ近づく車窓城が見え 牧人
 花嫁が車窓の景色ばかり見る 智子
 車窓が白み故郷近くなり 一三夫
 黒潮のうねりを遠く見る車窓 酔々
 鈍行で来て車窓の蟬しぐれ 生々庵
 夏雪食べたくなって往く車窓 岳人
 駅弁をつつく車窓に寄る笑顔 一三夫

兼題「原稿」

本多 柳志運

血みどろになって原稿帰って来 どんたく
 埋め草に迷う原稿あけのまま 大茂津
 原稿が活字になって見せ歩き 好一
 原稿のはかどる夜の酒うまし 肖二
 報酬どころか寄付までぞえて出す原稿 度
 原稿で稼ぎ印税でも稼ぎ 肖二
 どん底で書く原稿に支えられ 弥生
 原稿へ虚構の塔を組立てる 好一
 原稿もなく頭から出る柳話 祥月
 割愛の二字で原稿没になり 蘭
 直木賞以後原稿に羽が生え 鬼遊
 原稿を頼まれてから日が早し 与史
 放送原稿丁度時間となりました 生々庵
 大事業のように原稿書き終り 与史
 原稿が活字になってから不安 蘭
 二行でも原稿になる短詩 名
 点点の多い原稿でよく稼ぎ 栞
 原稿へ男の顔をのぞかせる 維久子
 熱弁がだんだん原稿からそれる 柳宏子
 速達なら間に合う原稿やと出来 一栄
 原稿の方で稼いでいる和尚 緑水

コニヤツクの減るほど原稿渉らず
 原稿も逃げ手心得書き馴れる
 原稿の挨拶代読ひつきかか
 借金を頼む原稿書かされる
 特ダネにする原稿の字がかす
 原稿に好きな女をおよがせる
 原稿へ生きぬくための嘘も書
 読めそうもない原稿が高く売
 子の書いた原稿親を驚かせ
 原稿を書く妻只今別居中
 原稿汚染原稿の字は美しく
 復稿へ私情を殺す記者のペ
 まだ銭にならぬ原稿書きつづ
 柳志

兼題「秀才」

八木摩天郎選

秀才の酒に付合う友がいず
 披露宴秀才才媛とくすぐった
 秀才も親からみればまだ子
 秀才と言われ追われる身をか
 多数決秀才だけが手を挙げ
 秀才と呼称れて見たい本音吐
 披露宴すめば秀才ただの人
 秀才だったことが当選してわ
 この母にこの秀才のいる系
 秀才が女難の味も知らず老
 だらしない寝顔秀才とは見え
 眼鏡かけ直して秀才むきな
 秀才かも知れぬと孫を抱き上
 秀才が駆落ちをしてそれっき
 秀才の短所見つけてケチをつ
 秀才の兄貴を持った不倅
 雀踊子

白溪子 一栄
 忠三 軒太
 美幸 幸太
 幸太郎 多志
 吸江 久志
 滋雀 久志
 緑水 久子
 維久子 維久子
 鬼遊 文秋
 雀踊子 雀踊子

秀才の子を持つ母に七光り
 大学は秀才でした夫に賭け
 秀才と鈍才世渡りから消えた
 秀才の噂された男が世をす
 秀才の孤独を語る目に出会
 秀才の無口へ親の物足らず
 秀才も力及ばずコネに負け
 秀才のつづく微熱が気にか
 秀才になると手相を信じ切
 秀才と言われ変人とも言わ
 秀才を少年Aにした時代
 エリートコースだんだん親から遠
 秀才を自負して人の和に欠
 秀才から借りたノートがわか
 秀才は女心に遠く居る
 秀才の聞えぬふりで知って
 秀才で通り孤独の道を行
 秀才が組織の力の底で馴
 恍惚のこれが秀才だった
 秀才の陰に貢いでいた女
 秀才に案外嫁の来てがな
 秀才もさほど出世もしてお
 秀才に二次会誰も誘わない
 川狂子 維久子
 千世子 花梢
 庸佑 綾女
 誓二 綾女
 牧人 誓二
 いわ 誓二
 多志 誓二
 滋雀 誓二
 文秋 誓二
 弘生 誓二
 逸名 誓二
 小松園 誓二
 柳宏子 誓二
 生々庵 誓二
 柳信 誓二
 静馬 誓二
 雀踊子 誓二
 摩天郎 誓二

兼題「黒」

水客氏の代選

若本多久志選

黒わくの妻が浮気をたしなめる
 広島のあの日に降った黒い雨
 豆炭ならいつかは赫々と燃えるだ
 性格の違い黒白つけたがり
 黒人に見えぬ鎖が音を立て
 登美也 踏草
 亞鈍 踏草
 軒太楼 踏草
 水 踏草

道を説く女一代黒を着る
 喪服着るその日を女ふと思
 黒を愛する如く海の夜は更け
 革新の市長捲き込む黒い霧
 黒眸の微笑かえっても哀し
 抜毛にも黒見当らぬ寒い朝
 諦めは心へ黒を着せたがり
 消えて行くエアあSLの黒煙
 着飾らぬセックスで黒がよく似
 黒幕に女がひとく居る話
 モナリザが好き少女で黒目勝
 黒い霧なぞのまんまで消えて行
 つけほくろ男ころりと瞞され
 染めかえて喪服になった形身分
 喝采の奥に黒子の光る汗
 黒眸の眼つみを忘れては救
 肚黒く銭を汚く貯めては救
 透き通るような女で黒が好き
 黒い霧はらんで政界ゆれ動き
 南無大師遍照金剛黒い顔
 黒髪の前まで深く少女病み
 白黒のテレビで幸せ嗜みしめ
 美しき極み哀しく黒を着る
 黒髪の長さ女に女の業がある
 黒猫はまだパトロンと認めて
 ほつとした顔もまじっている喪
 縛る心臓だけが黒く澄み
 ネットだけ黒にしてゆく小さい義
 アルバムにまた黒髪は黒光り
 白鳳のまま黒髪は黒光り
 黒を着る女傷心に溺れてる
 墨染に包む炎は燃えぬまま
 喜遊 鬼遊
 生々庵 生々庵
 幸太郎 幸太郎
 文秋 文秋
 右近 右近
 柳信 柳信
 右近 右近
 太近 太近
 摩太郎 摩太郎
 静馬 静馬
 好一 好一
 牧人 牧人
 葛城 葛城
 頂留子 頂留子
 武雄 武雄
 誓二 誓二
 曲手 曲手
 敏子 敏子
 君江 君江
 小松園 小松園
 止庵 止庵
 牧人 牧人
 舟人 舟人
 重人 重人
 生々庵 生々庵
 登美也 登美也
 滋雀 滋雀
 雀 雀
 弥生 弥生
 多久志 多久志

(河井庸佑・整理)

各地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

日川協高知県川柳大会 川竹 松風報

席題「黒潮」

黒潮で二代ついでマゲロ追う 中島生々庵選
 黒潮に乗って鯨は子を育て 松風
 土佐っぱの意気が黒潮引寄せる 嵐舟
 黒潮の波を岬の花と見る
 黒潮のうねりに漁夫は眼を開く
 黒潮にもまれて炎えるイゴツソ
 黒潮も土佐もあなたもいごっそう
 黒潮が洗うた石を土佐土産
 歌碑一つ黒潮見える丘に建ち
 黒潮に育ち都にあこがれず
 黒潮が匂うふるさとに馬にたち
 黒潮の産湯よさこい節が好き
 黒潮で眼下に見える宿を選び
 黒潮にのってほかない人の運
 黒潮に躍る一本釣りの腕
 黒潮にヨサコイ乗せて大漁旗
 黒潮に乗ればかめめの瞳が炎える

京都塔の会

松川

杜的報

生々庵

寝転んだ芝生で夢を抛りあげる
 鍵っ子と一番星は仲が良し
 雑草のこは羅漢の座裨窟
 早起きの僕を貧乏性の妻笑う
 ふるさとと別れる朝の歯を磨く
 呆っ気ない別れとなった宵の酒
 別れたらすぐせつかちの足になり
 この老母といつか別れる日を怖れ
 文豪の庭のしじまに立つ単衣
 雲水も日蔭を縫うて京の町
 鶯へふと雲水は笠をあげ
 作曲依頼されて小さな旅に出る
 雲水の心が竹にそそぐ雨
 吾が影と別れてみたいと思う日も

岸和田川柳会

植山

菅笠も茜だすきもない田植
 若夫婦ラジオを腰に田植する
 トンボまだ飛んでる町にいて平和
 よろこびを女の下駄で走って出る
 云い出せぬから溜息となって来る
 云う事に筋を通したヘソ曲り
 勝負フット淋しくなって嫁きおくれ
 趣味が身を助ける破目となる不況
 不況など言うまい今日の紙面よむ
 破られぬ虹かも知れぬ手紙書く
 成長の予等に嬉しく言い負ける

南海川柳会 (大阪市) 辻

主水報
 摩天郎
 肖二
 宏子
 儀一

今日はバラ色楽しいデザート待ち
 ばら色の日の出を拜む母達者
 おおらかな神様ばかり出る神話
 覚え書きなれた頃にもち出される
 時の記念日今さら時の重さを知る
 恍惚の準備するのを書きたがり
 バラ色を思い出させるメロドラマ
 今日学ぶメモを読んでるランドセル
 覚え書き声まで取っている安堵
 ヘエそこが抜けてましたが覚え書

川柳しんぐう

山男確実に踏む岩の角
 踏まれてもやがて花咲く路の草
 意地張った後の孤独に耐えきれず
 追抜けば追われる息を背に感じ
 後から呼び止められて負けている
 再起する明日へベタル踏んでみる
 己が道踏ましたくなし継がしたし
 山分けにしては遺言に書いてなし
 こじんまり女の山分けに書いている
 財と子を山分けにする離婚沙汰
 山分けを持出す笑顔不潔めき
 姑の目を背に受けて流し台
 腰踏んでくれる娘も去って嫁く
 踏み台となつて妻の座生き続け
 踏みつけられて涙が判ります
 踏みつけられあの人あれはこそ今のわれ
 仲人の午後はそのままだ辞待つ
 良く出来ていても後妻にたつ噂
 後押しを確めといてから強気
 貧政へのこのこついでくる福祉

大輪報

醉々
 とよ子
 金子松
 富子
 入道
 万作
 柳志
 与柳志
 句楽
 照子
 寅蔵
 寅蔵
 三千代
 与史
 凡九郎
 十しほ
 明郎
 弘生
 大輪

川柳わかやま

太茂津報

感謝する大夕焼に明日がある

髪白き母の手せわれし里の味

男心を知らずそこをついついてる

限界を悟ると狐ばかりかさない

英霊へ感謝すまなく忘れかけ

美辞麗句並べて感謝の顔で無し

好きでない美女をさざわれ腹が立ち

ネオンの灯美女はやもめです

おちぶれて益々遠くなる故郷

寝かす子へ捨てた故郷の子守唄

山門を出れば悟りが消えている

三百六十五日悟る心を置き忘れ

完全に悟れば俺も死に近し

望郷も瓦の色に裏切られ

折角の悟りを崩す友がいる

純真な孫の言葉に悟らざれ

ドウセ死にます悟ってるよな迷い

我がままな夫に耐えるも悟りかも

悔いてまた悔いて悟りを開かれず

虹のような男心を追う女

虹川柳倶楽部(唐津市)新岡回天子報

金槌のママ困らせる水着の児

泡立てる饅を横目に刃物磨く

濡したくない海水着二万円

夏空の星座を語り夕涼み

わるさする児はうまく水に消え

先生の言はる処迄息をきり

五月雨の音面白いトタン屋根

アジサイ色甍る梅雨の晴れ

勝久隆 虹一 三男 回天子 肖二報 一栄 あいき 正彰 凡九郎 文秋 思月 綾女 誓二 喜風 肖二 小松園 十止庵 鎮彦 良涼 弘生 三十四 雀踊子 河原みの報 精一 淡水 茅堂

梅雨晴間団地満艦飾となり
海水着きてもレディは海をさけ
嘘まこと子に念押しされ親吐息
梅雨に入りオムツ煉炭の火で乾き
遠泳のボートわたしたしも泳げそう
川柳東大阪 竹中
プラス、マイナス、イコール赤と出る
プラスするつもりが妻がゼロにする
プラスしかはじけぬ算盤とも見えす
苦勞人そんなところからでもプラス
借金を切り出す隙を与えない
切り出してしまえば君と僕の仲
切出してひっ込みつかぬはめとなる
切り出すまでに借金と感づかれ
言いにくい事を切り出すはめになり
お花見の時差葉桜に心足る
雨に濡れぼつてり媚びる八重桜
夜桜へ女ざかりを匂わせる
的のない矢がまた鳩を傷つける
参観目的のはずれた子の答え
あいまいへあいまいに聞く妻が居る
選挙戦肩入れすぎて違反する
肩入れが重荷となってきた役者
ええように頼れあんばいようしとく
あいまいにして本心を打ち明けず
銃口の的に祖国が二つある
川柳ささやま 河原みの報
スローガン程に中味のない予算
スローガンリーダーの腕だるうなり
管々と底抜け樽に水を汲む
もの云わぬ先に見透かす肚の底

一片の骨雄弁に語りかけ
喪が開けてからの睨に新芽もゆ
妙薬へ生きる執念耳を立て
平均に生きて可もなく不可もなく
母のない詩を小さな目で綴り
口許に詩がこぼれて嬉しい日
頼られてから長男は趣味を捨て
星の眼の射抜く真下で恋をする
真実を知った少年海を折る
エンジンに夢有り碧い海に生き

ダム底の祖先を偲ぶ螢の火
雨の日の事件証人居ぬ悲劇
雨の日を待ってる孫の赤い傘
雨に泣き雨に笑うて農に生き
当てもなく負け犬が行く雨の道
照り続く日々雨雲のもどかしく
ジーパンにはち切れそうな若さつめ
みんな寄って母の若さをちぎり奪り
腹のへる若さへ姑が気をつかい
反論のチャンス若さが吹き出した
気の若さ老人会を逃げ回り
若づくり後姿はよく似合い
川柳たましま 稲田 豊作報
切っ先は突いてはならぬから尖り
抜け道を抜けたら策が置いてある
突きさしはしないが針をじっと見る
雑誌から借りた話題の気の軽さ

枝葉 れい子 とんぼ 素水 百合子 緑村 一好 可住 近江 越山 宗珠 とよ子 豊作報 千翁 八笑人 林鶴 梁水

実を斬る原稿は短いぞ
 独善の夫が憎いほど太り
 理屈っぽい奴が雑誌を借りに来る
 トンネルを抜けると空は青かった
 うっかりとほめてセクスを疑われ
 立ち読みの雑誌革命などもたず
 底抜けの馬鹿と賢人ウマが合い
 善人と歩けは肩がこつて来る
 善が通じ無口うなずいた
 秘密です言うて秘密のない雑誌
 辛抱をほめられてる腹の虫
 褒められて戸惑っている反抗期
 善し悪しを体験しての子に意見
 ベトナム解放僕より瘦てる人ばかり
 少し派手撰んでくれた嫁をほめ



か
す
う

香代千数嘉

雅号ぶつちやけばなし (144)

ち
よ
か

千代香と云う売つ妓がいるからこれにしよう。美人になつたら千代香妓さんで儲けさすか、などと冗談云つてつけたとか。ところが初めてお逢ひした方の偽らざる実感。名前が何だか粹で句は若いし電話の声も若くて朗らかなので、どんなお若い美人か。もしかかマムカナ、等と思つていたのにと手を取つて笑ひこけられた事があります。だから私は年齢を発表するのは苦手。せめて精神年齢だけは若く個性ある句をと精進しています。

職業は商業、明治四十四年五月二十日生

(六十四歳)

成行 三幸堂 扇水 克枝 慶子 澄子 朝二 鼓草 流風 静海 豊作 誠一 笑門 安子 秀子

敗けられぬ足先明日へ向いてる
 川柳大坂 児島与呂志報
 雑念を振り切るようにコレクション
 やせ犬が朝から僕に吠えて来る
 感情に走り自縛の縄を編む
 終着駅凡人で終るそれもよし
 カルストの魚よ青空見たいだろ
 旅帰りの舌は茶漬けを恋しいがり
 ぜんまいもわらびも伸びて能勢の道
 切なさは湖底に眠るおらが村
 案内に尻込みしたい刀傷
 秀麗の富士を写して五湖の水
 大自然演じて湖ダムの音
 コレクション親驚かすものも貯め
 案内は祝儀貰うた声になり

里風 笑風 季贊 重人 洛醉 敏 晋二 甫久路 楽々 漁人 呑歩利 喜醉 雅果 本蔭棒

あのガイド息子の嫁にとまだ見つめ
 子の夢を叶えてやろう汗をふく
 出張の旅費を浮かした胸算用
 十階の蠅迷い込むあわて様
 もう一寸でチャンスつかむ人のがす人
 気にかかる話は妻と娘に隠し
 城北明朗句会 川口 弘生報
 歴史なし邪馬台ものに取憑かれ
 松葉杖なしで歩ける礼参り
 春斗の激しさレール錆びている
 冷房をありがたかったり恨んだり
 やめさせた酒霊前に悔みごと
 夜橋レースの値踏みする女
 万物の霊長裸で茶碗酒
 レコードを破った呼吸へインクビニ
 払いたい同士がレシの前でもめ
 靈感が利く妻を持つ不自由さ
 レイオフへ内職さえも見つからず
 中年やレモンの恋は遠く成り
 レコードの通りに行けぬオトモヤン
 例外もあり今日はロースも市場籠
 この家もレモン切らした紅茶出る
 格好よ女の子乗せレンタカー
 男性の大好きなのは妻のハイ
 割勘と聞いて胃薬持つて行き
 はたらいで老後楽しく二人づれ
 どんぐり川柳会 谷垣 史好報
 赤門へ抜けるトンネル掘っている
 トンネルを出てからトイレへ行く女
 幾何学を解けば離婚がしたくなる
 ペテン師の舌は何時でも濡れている
 眉水 道子 秀峰 胡蝶 与呂志 鶴丸 春果 牧人 正朗 ますゑ 満津子 柳信 右近 芳路 弘生 百酒 美幸 三十四 誓二 十止庵 喜代子 繁子 生仏 秀村 醉々 百酒 岳遊 鬼遊

トンネルを出て舟当にする団体
トンネルを出ると雪国 雪の風

北の旅酒と女とトンネルと
大臣は巧みに舌を使い分け

トンネルを抜け母の病む駅が見え
この謎が解けぬ男をはがゆがり
なぞなぞを解いてとかれて凡夫婦

トンネルを抜けて港の活きた魚
トンネルを出れば警察権変わる

トンネルを通り抜けても月があり
トンネルでわが泣き顔を盗まれる

明暗のトンネル抜けた退院日
亡父ねむるトンネルあまり早く過ぎ

痛いときよく突く舌をけむたがり
トンネルはやっぱり汽車で通りたし

オーエスケー川柳会 大坂 形水報

巢造りに本能的に知る野鳥
ヨットには若い二人が似合いそう

緑から光こぼれてきた晴れ間
結局は古巣へ帰る放浪者

僕だけの胸にしまつて無事に済み
傷の船周りは死魚に取りまかれ

舟ついで帰る古巣に山河有り
船旅の雨棧橋で終る恋

長島さん巨人の晴れ間みせてくれ
金融の緩和不況に晴れ間みせ

銅羅が鳴って船と陸とに分けられる
日本沈没本気に箱船考える

夢想したほどでなかつた愛の巢よ
船頭にトイレを頼む屋形船

真砂

小松園

修史

飄太

一二三

吸江

喜風

サヨ

鎮彦

美幸

万里

重夫

儀一

史好

入好
仙郎

丹誠のバラを晴れ間に見てまわり
南大阪川柳会 金井 文秋報

迷いからさめて両手に欲が無い
地下街を迷うて元のとこへ出る

真直な道で迷いを許さない
母娘して楽しゆう迷うショッピング

迷うてるうちに新型又迷い
ご自慢の時計が遅れた不覚

油断せぬ鬼は童話にもならぬ
どたん場の女が強いフィクション

フィクションで通すつもりが告訴され
靴下を脱いで土手の春を踏む

ぬるい手で名人対手を待つゆとり
野党から見れば手ぬるいあばきよう

ワンマンの構図直線ばかり引く
青年の構図三原色ばかり

見る人が見れば持て余した構図
構図引く4B平たく削られて

変えてゆく街にトイレのない構図
題名が付くと構図もそう見える

一瞬の構図を見せて花火散る
川柳たけはら 森井 青居報

わづらうてまだまだ感謝たらなんだ
母の日に音信不通の子がひとり

真相は誰も知らない南無阿弥陀
生きていてこそ春夏秋冬

本誌より付録の好きなものを買い
友だちができてそるばんおもしろい

まだ弱音吐けぬ人生五十から
花火師の野心まともに月へ向く

好郎

滋雀

肖二

智子

一舟

弘生

柳宏

誓二

美幸

雀踊子

好郎

あいき

小松園

柳志

牧人
十止庵
千梢
鎮彦
喜風
君秋
君子

藤井比呂夢作品集
にんげんの旗

「柳都」に拠る気鋭の異色作家である(石原青竜刀) 柳界にも稀な旺盛な反骨精神を持つ作家でありエッセイストだ(佐藤正敏) 彼は川柳を書くことにより、権威へのレジスタントは更に激しく高まった。(大野風柳) いくざあれば ふつふつと湧く土下座の血

発行所 新潟市中山七三三―一

藤井比呂夢方

こんな木にも若葉生命をふりしぼり
期待するどの子も家に居てくれず

こばれ陽を踏んで五月の空青し
春うらら闘犬の性捨てて伏す

読み切った本の余韻が眠らせず
さまざまな想いを呑んで雲流る

豪放に生きたしこの青空のもと
逢えば愚痴逢わねばさみし女親

人間不信見えない壁につきあたり
来年はここに住める気が立ち

仲人を買うて出る奴の本を買う
ネギ刻むリズム平凡でよし朝日

それからのリズムも暗いきのこ雲
執念のバツを胸に達磨に目

ウインブルドンに咲く執念の花
老農の執念土地にしがなり

執念が表彰台の人となり
岸壁の母に我が子は生きており

藤井比呂夢方

貞子
かつ子
紫光
峰泉
一路
のばら
文明
英詩
西合
水子
スミ子
文晴
政己

妥協して今日は敗者の酒に酔い
妥協する余地が無いでもないお願
札束に骨をぬかれてる妥協
商魂へけちな財布が妥協せず
妥協せぬ老の徹愛語機とり
叱られたとぼちり家へ持ち帰り
叱る声馬耳東風と聞き流し
叱られて叱って親と子の絆
駅長は笑顔で子供叱ってる
全快も間近い聴診器も笑う
心臓の愚痴を聞いている聴診器
執念を貫き助言はねのける
和歌山七面句会
中筋
三幸報

博友 友志 夏彦 秋月 武士 照久 昌吾 照路 鮫虎 巖嘉 折郎 三幸報 其夕 勇次 富子 光治 幸子 澄子 ふく代 佐知子 政夫 太三 太三 武雄 知世 三幸 南柳報 育園 茂子 つとむ

矢がすりに袴の折目古写真
どん底の生活で折目云うとれず
結納に折目正して大安日
折目ある言葉をまねた時もあり
折目正しい母が士族を口にする
愛蔵書折目つけられ戻って来
中性の女議員にある人氣
カルセールマキにはジャまのど仏
ふる里へ女になって帰えられず
化学に弱く中性記号読み違え
中性の女装の声のどぼとけ
大胆に来て中性のパンタロン
中性が売物がつぼりと稼ぎ
ドラ息子男芸者でめしを食え
中性のバストのところが物足らず
初舞台から中性に育てられ
がむしゃらに生きて女を忘れさせ
母子家庭母中性の覚悟決め
中性に育てた覚えのない夫婦
寒川柳会 (鳥取県) 清水
座布団は喜怒哀楽を知って居り
座布団の厚みに話切り出せず
宴会へ座布団も又酒を飲み
筆不精ハガキの値段も忘れ去り
ふるさとの若葉なつかし桜餅
ふる里の窓に若葉の匂う頃
座布団も敷かず対談腹を読み
試枚の杖青葉若葉に励ませ
一枚の葉書信実のを云い
(通報者諸氏にお願い) なるべく16字以内
の句をお送りください。

規一朗 儀一 南柳 綾女 柳信 肖二 石捨 信義 誓二 美代 恒明 摩天郎 小路 多津緒 宏子 正彰 小松園 一保報 満春 牛歩 秋月 江月 撰葉 みなと 一保 秋女 寿男

第27回 大阪文化祭川柳大会
日時 11月9日(日) 10時開場 1時締切
・開会
会場 中央公会堂(3階小集會室)
「大阪らしい川柳」
川柳文学社主幹
「野性」 堀口 塊人氏
「ファン」 加賀 破竹選
「壁」 久保田以兆選
「近頃の社会記事から」 橋高 薫風選
「ねばる」 広瀬 反省選
「橋」 岸田万彩郎選
伊東 静夢選
各題2句以内(締切1時) 出句は出
席者に限ります。
席・兼題とも秀句に、府知事、大阪
市長、府市教育委員長から川柳賞。
入選句集は三〇〇円。当日申込受付
主催、大阪府・大阪市・大阪府教育
委員会・大阪市教育委員会

台風5号による
水害地皆様にお見舞い
申しあげます。
高知・今治方面の皆さま、いかががでし
ようか。ご無事を祈っております。
川柳塔社

本会川柳忌句

日時 九月八日(月)午後六時
会場 大阪府中小企業文化会館(五階五一号室)
天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町
九丁目下車南三百米・電話七七一四〇九六

(今月の出題・高杉鬼遊)

兼題 柳話
「ひらめく」野村太茂津
「象」金井文秋選
「童話」戸島静馬選
「地」村好方郎選
「園」田古郎選
席題 二題 当日発表
各題三句以内厳守
会費 三百円

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷中之町20

川柳塔社

10月の兼題 「狐高」 「先取り」
「量」 「園」

募集

十一月号発表(9月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
水煙抄(10句) 菊沢小松園選
愛染帖(3句) 橘高薰風選
課題吟(各題5句以内)

「夜」柳楽鶴丸選
「紅葉」藤岡花梢選
「平和」吉田圭井堂選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表(10月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
水煙抄(10句) 菊沢小松園選
愛染帖(3句) 橘高薰風選
課題吟(各題5句以内)

「歳暮」高橋千万子選
「納め」高橋鬼焼選
「プリンス」吉岡通児選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

規定はお守りください

定価三百円(送料十六円)

半年分 千八百五十円(送料共)
一年分 三千六百円(送料共)

昭和五十年八月二十五日印刷
昭和五十年九月一日発行

大阪府南区鯉谷中之町二〇番地
編集者 中島蓬太郎
発行人 藤原童心社
印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪府南区鯉谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にか
い贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



なんば本橋条
日本橋四丁目
大阪・東京・京都

高島屋

★残暑お見舞い申しあげます。

来るか句集ブーム

★生々庵主幹の喜寿、小石夫人の古稀を記念して来春三月にご夫妻共著の句集が出る。この選句には刊行委員の春巢、栗、多久志、小松園、好郎、水客、薫風諸氏の副理事長以上が参加する。ぼくも末席を汚がすことになった。南西が数点はいるので印刷所を吟味するなど、多久志氏は早くから東奔西走されていた。

★大坂形水氏も数年後にせ

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
☆食後すぐのものが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬局で



まる古稀を記念して句集刊行を企画中である。菊沢小松園氏や高橋操子さんもヒマある時に句を拾っていられるとか。

11月には葵水漬句集

★垂井千寿子さんが故葵水氏の遺句集を出すため昨年から準備をされ、したが、このほど川村好郎、西尾栗、野村太茂津三氏の選句も完了、いよいよ11月に発刊のはこびとなった。本誌11月句会は「垂井葵水遺句集刊行記念句会」となる。葵水さんは誰からも愛された超党派の柳人だった。

★ぼくにはスポンサーがついて、早くから句集を出すよう薦められていたが、せつかくのご好意だから来年五月あたり発刊することに

▼葉子コーナー

▼葉子コーナーを書かして頂きました。4年となりました。書く事の一歩嫌いな私でしたが、いつの間にか苦しみが、楽しみが同居するようになりました。

▼辛か不幸か、いまだにサ店でないと思いが浮んでこないのです。

した。ぼくの場合は何かを記念してというのではなく、ただそんなチャンスが来たというだけのことである。タイトルは、「川柳寄席」。

これは昨年からきま

つていた。スポンサーの注文で、漫才台本やディスクジョッキーを一、二本入れ新聞や雑誌へ書いた寄席モノに寄席の川柳などをゴジヤゴジヤ混ぜて、いわゆる「色物句集」になる。秋田実先生が序文を10枚ほど書いてやると云つてくださった。どっちにしても川柳塔でお世話になるが、発刊所は「漫才作家くらぶ」になる。

差別語規制

★「上方芸能」41号(七月号)は「差別語規制に揺らぐ上方芸能界」を特集している。「ことばのいいかえがテレビ、ラジオを中心にマスコミで進められている」といっているのである。「藤山寛美のアホ役や、めく

らや「つんば機敷」もいけないそうだ。「女中」を「お手伝いさん」といいかえるようになってから、かわれわれも「女中」の句が作れなくなった。じわじわと

検閲時代が忍び寄っているという感じだ。豆秋さんの句集には「乞食」などがよく出てくるが、これなども一番にチェックされるだろう。

芦屋語

★漫才台本に一時芦屋語をよく使った。「おテレビや」「おラジオ」にはじまって「お京都」「や」「お大阪」で舌をもつれさせ、オチは「お奈良」である。現在でも料理の時間には、やたらと「お」が多い。日本語が乱れても「お」が多ければ無難のようである。

俺と僕と私

★路郎先生の「俺に似よ」は「僕」にすべきだと、水府先生が云われたとか、そのような話を聞いたことがある。路郎先生は「この場合、子に対しては「俺」のほうがいい」と云われたのを見て「ある放送局で「僕」というのを「私」にしてくれと訂正されたとか。大阪ことば

の「わて」「わたい」「わい」では「わて」が一番上品らしいが、今ではもう使う人もすくなくなつた。ぼくは外では「僕」だが、肉

● 川柳塔社 同人 句集 ●

『川柳塔』

額 価 1500円 送 料 160円

身には「俺」である。やはり路郎先生が云われたように「親み」から来るのだろうか。

句集・私達

★句集「私達」の準備中、路郎先生から何かいい題はないか、とのことで二、三提出したが全没だった。私達では少年少女の句集のようだったと思つたが、今日になつてみるとそう抵抗を感じなくなつていく。

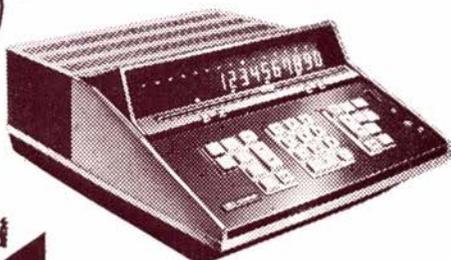
(不二田一三夫)

昭和四十七年一月二十五日
昭和五十年九月三日
第三種郵便物認可
発行所(毎月一日発行)

川柳塔

九月号

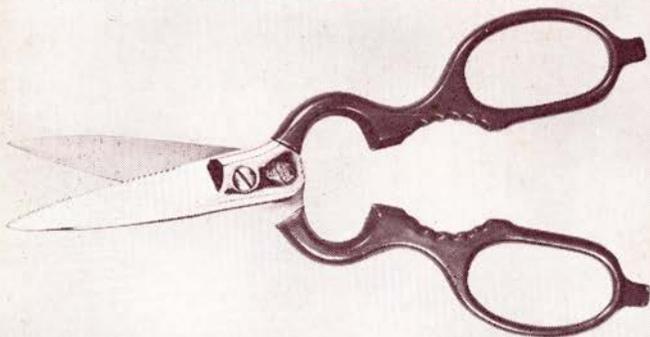
タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 10C-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社



お台所の
新兵器

ヘンケル万能バサミは、アイデアをいかしたお台所の新兵器。カニ、スルメなどの干もの料理から、栓ぬき、ふたあけなどにも使えます。世界100ヶ国の人々に愛用されている人形印のヘンケル刃物を、あなた自身でおたしかめください。

ヘンケルの刃物は百貨店・スーパーマーケット有名刃物店でお求めください。



J.A. HENCKELS
ZWILLINGSWERK AG
SOLINGEN / GERMANY

日本ヘンケル(株)
神戸・東京



定価 三百円 (送料十六円)